

都市計画家

# Planners

2017 WINTER

84



特集

## 全国まちづくり会議 2016 in 高岡

伝統と創造のまちづくり

—匠による高岡からの地方創生—

# 全国 まちづくり 会議 2016 in 高岡

10月15日(土) 16日(日)

ウイング・ウイング高岡

## 全国まちづくり会議 2016 in

今回で12回目となる全国まちづくり会議は、2016年10月15(土)・16日(日)に、高岡市ウイング・ウイングの生涯学習センターにおいて開催されました。今年も大勢の方にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

ご承知だと思いますが、高岡市は全国総合開発計画で謳われた新産業都市に指定された都市であり、都市計画では有名な都市です。私自身も約30年前にこの業界に入った際、地方都市での工業系開発が「新産・工特」という略称で呼ばれていたのを覚えています。さらに、その計画には高山英華先生も関わられていたと聞いており、まさにPlannerには垂涎の都市と言えるでしょう。当時の計画内容までは知るよしもありませんが、富山新港の開発のみならず、高岡の伝統産業に関しても深い検討が行われたのではないかと推測されます。その結果、江戸初期に興った高岡銅器から連なるものづくりの系譜は、現在でも脈々と市の産業として息づいており、銅製品の国内シェアは90%を占めるなど、日本でも有数の産業都市としての地位を確たるものにしています。また、近年ではクラフトのまちとしても知られてきていますが、それは若手の工芸家など、ものづくりを支える人材が育ってきただけでなく、ものづくりからアートへの転換を見事に果たした成果であると言えるでしょう。もちろん、それは新産・工特だけの成果ではなく、地元の産業界や行政、大学、市民が地道にもものづくりの伝統を守り伝えようという努力によるものと考えられます。

また、高岡市は富山県第二位の都市ですが、実は江戸時代は加賀藩の領地内であり、その穀倉地帯であったこともあって、金沢や京都と深いつながりが見られる歴史都市でもあります。重要伝統的建造物群保存地区が2地区指定されており、それぞれ風格ある街並みが残されていますが、それ以上に、市民の意識の中に高岡の歴史と伝統を守り伝えようという意気込みが伝わってきます。

確にかかつて賑わっていたであろう中心市街地の商店街は衰退しているように見えます。中心市街地だけでなく伝建地区にも空き家が増加しているようです。そうした状況に対して、仲間を集い、問題意識を共有し、解決策を探り、実行する。極めてオーソドックスですが、まちづくりの原点を確認することができました。

## Planners 84 CONTENTS

全国まちづくり会議 2016 in 高岡特集号

- 2 特集主旨 全国まちづくり会議2016 in 高岡を終えて……石川 岳男
- 4 全国まちづくり会議2016 in 高岡を終えて……………堀 英人
- 5 イベント概要
- 6 キーノートスピーチ・パネルディスカッション  
伝統と創造のまちづくり～匠による高岡からの地方創生～…石川 岳男
- 8 ものづくりまちづくりセッション  
産業都市・高岡の戦略～イノベーションをまちから創発する～  
……………伊藤 清武、千葉 葉子
- 10 ejob事業の普及と発展に向けて その2  
～都市計画コンサルタント優良業務登録事業の試行結果を題材に～  
……………北本 美江子
- 12 空き家利活用フォーラム  
空き家利活用の新しい展開をめざして……………小泉 秀樹
- 13 高岡での実践者から……………服部 恵子
- 14 まちなか再生フォーラム  
～まちにかかわる場の創造から始めるまちなか再生～…長谷川 隆三
- 15 高岡での実践者から……………瀧根 智志
- 16 復興まちづくりフォーラム  
東日本大震災今までとこれから……………高鍋 剛
- 18 特別講演+鼎談  
伝統工芸や芸術文化を創造的なまちづくりに活かすために  
～世界と日本の創造都市に向けた取組事例から～……………中塚 高士
- 20 シネマティック・アーキテクチャin高岡  
きっと、会ったことのない、誰かのため(に)／高岡・イリュージョン  
……………緒方 恵一
- 22 ポスターセッション/プレゼンタイム  
……………平井 一步・田嶋 麻美・梶田 佳孝・長谷川 隆三
- 24 全まち高岡の成果と意義……………小林 英嗣
- 25 次回開催のご案内……………田島 泰
- 26 前田利長公にゆかりの地を巡ったエクスカーション……………佐谷 和江
- 26 書評 石田頼房先生が遺したものを、伝えるべきもの……………山口 邦雄
- 27 本部だより、支部だより

裏表紙 2016年9月1日～2016年12月31日 協会の動向

## 高岡を終えて

全国まちづくり会議実行委員会委員長

認定NPO日本都市計画家協会副会長

石川 岳男

実際にそうした取り組みによっていくつかの空き家が再生してきており、着実に成果があがってきています。交流会の料理は、そうした空き家再生による店舗に入居しているカフェに依頼しましたが、素晴らしい料理の数々を提供していただきました。それは高岡の魅力を外部に発信しようという意識の現れのように感じます。また、空き家フォーラムや街なか再生フォーラムにご登壇いただいた地元で活動されている方々は、いずれの方も自信が満ちあふれており、活動の内容の質の高さと継続性には目を見張るものがありました。

人口減少が進む中で、全国いずれの都市でも活性化を目指した取り組みを行っています。そしてその成果を数値化することが求められています。しかし、高岡市は成果を数値で表すのではなく、行動で示すことができる希有な都市であり、市民の意識の高さで高岡市のすばらしさを守り伝えています。考えてみれば、都市の活性化を数値で示すのは単にその方が霞ヶ関に理解してもらいやすいからで、本来都市の活性化は、数値ではなく市民の誇りや満足感など実際の活動や意識に示されるものではないでしょうか。自らが住み暮らし働く都市を誇りに思い、その都市を次世代に引き継ごうとする取り組みこそ、現在の日本の都市に求められていることでしょう。高岡にそのモデルを見た気がします。

こうした高岡の誇りは、9月の連休に開催されているクラフト市場街などのイベントで具現化されています。この期間には3つのイベントが同時開催されていますが、それぞれがクラフトをテーマとして、伝建地区の山町筋、金屋町、そして駅周辺のエリアを主な会場としています。今回の全まちにおいて、事前エクスカーションとしてこのイベント視察を組み込み、私も参加しましたが、何より感心したのは伝統的な街並みをうまく活用したプログラムです。例えば、金屋町での着物のファッションショーは、伝統的な街並みと日本の文化である着物をうまくマッチさせたプログラムであり、それを富山大学芸術文化学部の学生が中心となって企画しているところに意味があり、さらに多くの人がそれを楽しみにして訪れていることに最大の効果があるでしょう。

イベント時には、金屋町に比べて山町筋には人が少なく、さらに中心市街地エリアは閑散としているなど

の課題もあります。出展者と訪問客の交流ももう少しうまくやれば、さらに訪問者が楽しめるようになるでしょう。外から来た人にとっては3つのイベントの関連性がよく分からないなどの改善点も感じました。

このような大規模なイベントは、一度成功したと判断すると、周りの人の意見を聞けなくなってしまうことが一番問題かもしれません。現在のような先駆的で独断的な内容をこれからも継続し、一層の発展と持続的な取り組みとしていくためには、より多くの声を取り入れる仕組みが必要です。次回訪れた際には(おそらくそうになっていることは確実ですが)、さらに発展したイベントになっていることを期待しています。



今回の大会では「伝統と創造のまちづくり ～匠による高岡からの地方創生～」をテーマとして、主に高岡市の中心市街地などに焦点を当てて様々なセッションを行いました。例年と同様ですが、それぞれの分野の専門家にご登壇いただいたほか、地元で活動されている多くの方々にも活動内容の報告をしていただき、その上で、高岡市での取り組みから見える課題を敷衍し、それぞれのテーマの根底にある課題を見いだすとともに、そこから見える可能性と次への取り組みのきっかけについて様々な観点から議論が行われました。そこで語られたことはほんのわずかかもしれませんが、何を得たのかは人により異なるでしょう。重要なことは、そこから得られた成果を次につなげる努力を各自がすることです。その点で、高岡市のまちづくりが半歩でも前に進むことができれば、日本都市計画家協会としては大会を行った意義を確認することができます。

高岡市や富山大学をはじめとする関係者の方々には大変なご苦勞をお掛けしました。改めて御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

# 全国まちづくり会議 2016 in 高岡を終えて

高岡市都市計画課長 堀 英人

## 1 はじめに

過日開催した全国まちづくり会議2016 in 高岡におきましては、全国各地や市内のまちづくりに取り組む多数の方々にご参加いただきました。本大会は「伝統と創造のまちづくり～匠による地方創生～」をテーマに、ものづくりを生かしたまちづくりのあり方について、本市の取組みの発信や貴重なご意見を伺うことができ、大変有意義なものでありました。

## 2 大会を振り返って

本大会は、高岡の伝統工芸職人による新しい技術への貢献能力の実証及び現代における職の確保を目指すことを目的としました。「ものづくり」、「空き家利活用」、「まちなか再生」の各フォーラムに関しては、現場で活躍している地元関係者の方々を中心として企画を行いました。この結果、専門的な知見から今後の高岡のまちづくりの方向性を探る活発なディスカッションとなり、時間を超過する熱い議論となりました。

また、ものづくりフォーラムを担当された「ものまち研」の皆様は、事前に来訪していただき、地元企業へのヒアリングや本市の3大クラフトイベントである金屋町楽市、高岡クラフト市場街、高岡クラフトコンペをご覧いただき、伝統の技を生かした新たな市場の開拓や伝統と先端を融合した革新的技術の挑戦について企画され、充実した内容となりました。

また、高岡イリュージョン担当のシネマティックアーキテクチャ東京の皆様は、高岡を度々来訪され、地元でのワークショップを通じ、街角風景とまちづくりの視点から、高岡を捉えた幻想的な壁画や映像などの作品を展示され、新たな高岡に気づかされました。

また、相乗効果により集客を増やすための工夫として、空き家相談会やわたしの故郷（ふるさと）写真コンテスト、パブリックアートフォトコンテストの実施など、本市に関係のある企画を同時に開催いたしました。

## 3 本市の課題と今後の取組み

本市の中心市街地は、高岡駅の北側に広がる地域であり、開町（1619年）以来の歴史・文化を受け継ぐとともに産業、行政等の様々な都市機能を担う「高岡の顔」として発展してきたところです。

しかしながら、居住人口の減少による空き家の増加、これらに伴うコミュニティの機能低下に加え、商業の衰退など、中心市街地が果たす役割の低下が懸念されています。

また、本市は製造業を中心とした「ものづくりのまち」ですが、付加価値の減少、雇用吸収力の低下、労働生産性の停滞、競争力の低下なども懸念されます。

今後は、北陸新幹線を活用した雇用力のあるサービス産業、経済波及効果の高い観光分野への展開を見据え、本市の文化資産や伝統工芸などの観光素材、中心市街地のストックを最大限に活用し、新幹線時代の新たな交流・創造拠点として生まれ変わることが重要ではないかと考えております。

本市では、これまで受け継がれた歴史・文化の伝統に立ち、さらに本市が有する可能性と人々の創造力を最大限に発揮し、観光・産業振興等や地域の活性化を実現する「文化創造都市」を推進しておりますが、新たな総合計画に基づき、すべての人がそれぞれの能力を生かして自立し、次代を担う創造性豊かな市民が育つ「市民創造都市」に挑戦していきます。

## 4 おわりに

最後に、高岡実行委員会の委員長を務められた富山大学武山副学長や芸術文化学部の萩野准教授、大会運営にご協力いただいた高岡法科大学の皆様方には、改めて厚くお礼申し上げます。

また、本大会にご参加いただきました皆様には、地域課題の解決策の提案やアドバイス等、引き続きご指導いただきますようお願い致します。

# 全国まちづくり会議 2016 in 高岡

## 伝統と創造のまちづくり

### -匠による高岡からの地方創生-

2016年10月15日(土)、16日(日)、ウイング・ウイング高岡(富山県高岡市末広町1-7)にて開催された全国まちづくり会議の概要は以下のとおりです。

主催：認定特定非営利活動法人 日本都市計画家協会

共催：高岡市、北日本新聞社

後援：国土交通省北陸地方整備局、富山県、富山新聞社、富山大学芸術文化学部、一般社団法人 日本建築学会、公益財団法人 日本都市計画学会

協賛：株式会社 建設技術研究所東北支社、株式会社 新日本コンサルタント、株式会社 日建設計、株式会社 日本設計、北陸ココ・コーラボトリング株式会社、株式会社 榊田酒造店、三井不動産株式会社、三菱地所株式会社、株式会社 安井建築設計事務所、若鶴酒造株式会社

### パネル展示出展団体

《一般参加団体出展》(五十音順)

- ・糸島空き家プロジェクト
- ・美しいまちづくり研究会
- ・加越能バス株式会社
- ・金沢・LRTと暮らしを考える会
- ・特定非営利活動法人グリーンネックレス
- ・香陵校区まちづくり協議会
- ・JSURP震災復興タスクフォース
- ・JSURP ルーフスケープ研究会
- ・城端線もりあげ隊(砺波市)
- ・高岡市空き家活用推進協議会
- ・高岡伝統産業青年会
- ・高岡市役所

- ・東京工業大学真野研究室
- ・一般財団法人都市農地活用支援センター
- ・富山大学芸術文化学部
- ・NPO法人ネットワークアシスト高岡所属コードフォー高岡 (CodeForTakaoka)
- ・福井エコビレッジ研究会
- ・NPO法人ふくい路面電車とまちづくりの会 (ROBA)
- ・まちかどサロンプロジェクト
- ・町家体験ゲストハウスほんまちの家
- ・路面電車と都市の未来を考える会・高岡 (RACDA高岡)

《企業出展》

- ・株式会社安井建築設計事務所

### タイムテーブル

10/15(土)	4F	5F				1F	6F	施設外
	ホール	501	502	503	504	交流スペース	会議室	
13:30	開会式							
14:00	キーノートスピーチ							
15:00	パネルディスカッション		高岡・イリュージョン from シネマティック・アーキテクチャ in 高岡		ポスターセッション	「わたしの故郷」コンテスト(展示)	空き家相談会 ※10時開始	
16:00		ejob事業の普及と発展に向けて		ものづくりまちづくりセッション	プレゼンタイム	パブリックアートふれあいフォトコンテスト(展示) ※10時開始		
17:00								
18:00						交流会		
19:00								

10/16(日)	4F	5F				1F	6F	施設外
	ホール	501	502	503	504	交流スペース	会議室	
9:30								
10:00								エキスカージョン ※8時45分開始
11:00			高岡・イリュージョン from シネマティック・アーキテクチャ in 高岡	空き家活用フォーラム				
12:00					ポスターセッション	「わたしの故郷」コンテスト(展示)	空き家相談会	
13:00		復興まちづくりフォーラム						
14:00				まちなか再生フォーラム		パブリックアートふれあいフォトコンテスト(展示)		
15:00								
16:00	特別講演 佐々木雅幸 鼎談							
17:00	閉会式							

## シンポジウム

# 「伝統と創造のまちづくり ～匠による高岡からの地方創生～」

全国まちづくり会議2016in高岡の冒頭は、小泉秀樹東京大学大学院教授によるキーノートスピーチで始まり、その後、高橋正樹高岡市長、萩野紀一郎富山大学准教授、小林英嗣協会会長をパネリストとし、小泉教授をコーディネーターとしたシンポジウムによる幕が開けられた。

### キーノートスピーチ 小泉秀樹

## 『多主体共生による再生のまちづくり —伝統からの創造を目指して—』

日本は世界で一番の高齢社会になっており、今後は人口減少に加えて世帯も減少してくる。介護の面でまちを見ると、本人も家族も自宅や地域社会で過ごすことを望んでいるが、その一方、職場と家族以外の付き合いの無い人の割合は世界の中で、日本がトップである。ただし、生産年齢人口の減少は昼間に地域社会で過ごす高齢者や子どもの比率が相対的に高くなるという側面もある。こうした地域社会の状況では、社会的包摂が課題となってきた。



産業面で見ると、高付加価値のニッチな製品にチャンスがありそうだ。大量生産・大量供給の製造はロボットや安い賃金の国に奪われている。そのため、高付加価値で高利益の事業にシフトせざるを得ないと考えられる。経済複雑性指標を見ると日本は断トツ首位で、日本の強みと言える。これは多様な産業が息づいているという証拠であり、裾野が広く、中長期的な成長の源泉となり得る。また、アマゾンやロングテールで30%の売り上げを占めているなど、インターネットの進展でニッチな製品が消費者の手に届きやすい環境が育ってきている。地域にあった価値の高いものがグローバルな環境の中で強みを発揮する可能性がある。これにノンプロフィット、互助的なものを囁ませることで成り立つものが色々ある。

これを3つの視点から解いてみたい。

一つ目は、少子高齢化ではコミュニティケアが鍵を握っているということである。福祉の分野では地域包括ケアが進められているが、元々の地域包括ケアはコミ

ュニティケアが語源であり、高齢者だけのケアではなく、障害者や単身世帯などの弱者を地域でケアすることを意味する。多様な主体が連携して顔が見える関係をつくることで色々な活動ができ、地域の包摂が生まれてくる。これを実現するのがコミュニティケアである。

もう一つは、場づくりから始めるまちづくりである。「場」とは様々な価値に基づいた社会的意志や活動をする機会と空間のことであり、それが合わさって「場」になる。それを創り出すことをPlace makingというが、さらにそれを都市全体に組み合わせていくことをPlace Based Planningと呼んでおり、アメリカでもそうしたプランニングが行われている。

この二つに加えて、伝統を活かしてイノベティブで刷新的な事業を進めることで、ニッチで高付加価値な産業を育成していくことが重要と言える。

この3つの視点を連携することでこれからのまちづくりはうまく回っていくのではないかと。伝統からのまちづくりはその先にある。

### パネルディスカッション

**高橋:** 北陸新幹線が開通して高岡市への来訪客は1.7倍になった。全体としては良かったが、新幹線の駅が高岡駅から離れた場所にできたため、まちが二分されてしまい、中心市街地は空地や青空駐車場の増加で賑わいが減少してきている。商店街は防火建築として整備されたもので、老朽化しているが連担した建物のため、個々には取り壊せない。



新高岡駅周辺の整備は進んだが、高岡駅は駅のごく周辺の整備に留まっている。重伝建地区が2地区あるが、いずれも点的な整備に留まっているため、点から面に広がっていききたい。新高岡駅、高岡駅、末広町、山町筋、金屋町と軸線状に並んでおり、これを都心軸と呼んで、今後はここに都市機能の集約を進めたい。

これまでものはづくりをして、それを他で売って儲けていたが、これからはものづくりで稼ぐだけでなく、歴史・文化資産を活用して、人に来てもらって金を落としてもらえるようなまちづくりを進めたい。そのためのプログラムが重要と考えている。

**萩野:** 東京郊外の練馬で生まれた。留学でフィラデル

フィアに在住し、真剣に移住も考えていた。その後日本に戻ったが、縁があって能登に移住している。能登の自宅は70戸100名強が住んでいる古い伝統や風習が残る地域にある。



季節ごとに絶え間なく活動しており、それで里山が守られていることを勉強した。現在では、「まるやま組」という名前で里山の農、自然、食、文化、景観、経済などをつなぐ活動をしている。

高岡に来てからまだ半年だが、芸文学部の役割として、もっとまちに入り込むことが必要だと思っている。まちの人も学生を連れ出してほしい。自分も空き家で授業をするなど、キャンパスから飛び出していきたいと考えている。

**小林:**二つ思ったことがある。



一つは産業連携。太平洋側に産業集積は、トヨタのような企業を多くの系列企業が支えて海外でものを売って稼ぐという、縦系列のネットワークだ。

それに対して、日本海側の産業は古くからあった技術をイノベティブに考えて、個々に製品化している。例えば仏具や鋳物にデザイナーが関与して、アートとして。ただし、単品では規模が小さいため世界をマーケットにするためには、協力して世界に売れるパッケージの価値を創ることが重要で、そのために横の連携や系列化が必要である。

もう一つ、新高岡から高岡の間は現状ではつまらないが、大化けさせることが出来るのではないかと考えている。例えばポートランドの古い倉庫街のパールディストリクトでは、行政が全部保全を前提としてリノベの計画を作り、計画に基づいて一個一個の建物の改修と新しい担い手づくりをやってきた。そのため、そこで開業する人がたくさんいる。それでパール地区は大化けした。高岡の商店街はそういう三丁目の夕日の可能性があるのではないかと。ある意味では、近代の残渣をどう活用するかという視点であり、新高岡駅と高岡駅の間を近代の手法を使っても駄目だと思う。グリーンインフラ的な感覚で新しい近代的なインフラにチャレンジすれば、日本の中でトップに行くのではないかと。

**小泉:**具体的なテーマに落ちてきた。例えば駅周辺など中心市街地の商店街の再生をどう考えるか。

**萩野:**昭和時代にできた古い建物は、あの建物自体の良さを活かしたまちづくりの可能性ないか。文化遺産という言葉があるが、私は文化資源とか地域文化資源という言葉を使いたいと考えている。遺産という言葉と変えられないという意識が感じられるが、含めた景観を文化と捉えているので、あれを文化と捉えてはどうか。

**高橋:**エリアと時代の流れをセットで考えるというのは重要で、住民にも考えてもらいたい。特に商店街のエリアを市民の資産としてのまちとして考えると、今までどおりのものを売るという商店街ではなくて、集まることの意味とか時間をどう消費してもらおうかなど、そういうことも含めて価値の提供を考えなければいけないと考えている。できれば楽しむ場所、文化を感じる場所、文化活動を行う場所として再生したい。山町筋や金屋町では若い人が中心に活動しており、それを応援するというをやっていききたい。行政は場を提供することが役割と考えている。

**小泉:**小林会長からパッケージ化して付加価値をつけることが重要という話があった。

**高橋:**非常に重要だと思う。高岡は加賀前田家ゆかりの町民文化という内容で日本遺産に選ばれている。殿様文化に端を発しながら、町民文化として花開いたところか味噌である。生活文化とか町民の心意気、打ち出し方が重要かと考えている。

**小林:**高岡はこれだけ食材が豊かなのでガストロノミーでまちの再生にチャレンジできる希少な場所だと思う。豊かな食は華麗に生きることを保障し、歴史・文化・伝統に同化して荘厳に死ぬことができることも重要で、その価値があると思う人は自分の人生を全うするために再投資をしてくれる。場所や地域に再投資できるというのが鍵になるのではないかと。

**萩野:**これからは歩けるコミュニティとしてまちをつくっていくことが重要だと思う。人と人が歩き出会うことができるまちになってほしい。

**高橋:**歩けるスケールは高岡のまちはそれほど大きくないので、歩いても30分ぐらい。歩いた間隔を大事にしたい。移動は単なる移動ではなく、移動の間が意味あるまちにしていきたい。

(文責:石川)

## 産業都市・高岡の戦略 ～イノベーションをまちから創発する～

### ■はじめに

ものづくり・まちづくり研究会は、これからの産業と都市、ものづくりとまちづくりについて協働的な検討を行うことを目的に平成21年に発足し、毎年、全まちの開催都市を対象に分科会を開催している。

本年の開催地は富山県高岡市である。多くの伝統産業・産地が、グローバル化、生活ニーズの変化、新たな流通の仕組みなどの市場変化に対応できず衰退しつつある中で、高岡ものづくりは独自の進化を遂げつつある。伝統の技を活かし新市場を開拓する、伝統と先端を融合した革新的技術に挑戦するなど、地域からイノベーションを創発する高岡産業の風土は何かからつくられるのか？ 産業都市・高岡のものづくり・まちづくりは、今後どこに向かうのかをひもといていくため本セッションを行った。

なお、セッションは3部構成であり、課題Ⅰ：高岡の技術×産業集積を再評価する 課題Ⅱ：高岡の創造力を磨き、発信する 課題Ⅲ：革新を育むまちの雰囲気と土地利用戦略で構成される。

### ■プログラム

#### □課題Ⅰ：高岡の技術×産業集積を再評価する

冒頭、伊藤氏から高岡工業150年史の概説（次ページ参照）と高岡のものづくり企業として、6月に視察訪問したヨネダアドキャストを紹介した。ヨネダアドキャストは鋳物の伝統工業から発達し、ロストワックス精密鋳造、石灰るつぼの真空溶解など特殊金属の鋳造方法を確立してきた企業。精密機械部品の開発試作や人工関節などの医療分野へ進出している。

富山県工業技術センターの溝口氏からは、性能評価、依頼試験、技術相談などセンターが地域工業に果たしている役割と担当している野球バット、ゴルフクラブ開発の話をいただいた。

#### □課題Ⅱ：高岡の創造力を磨き、発信する

（有）モメンタムファクトリー・Oriiの折井氏からは、同社が伝統産業である高岡銅器の着色を専門に行う会社としての技術を生かし、これまで困難だった圧延板や伸銅品へ新たな発色技法を確立し、内壁素材・インテリア／エクステリアの用品・クラフト作品等、高岡銅器着色技術を様々な分野や市場を開拓してきた取り組みを話していただいた。

（株）能作の新彦氏からは、錫や銅製品の製造を得意とし、国内はもとより世界に販売網を広げている同社から、高度な鋳造技術をベースに、錫の曲がる特性を生かした新商品によるテーブルウェア市場の開拓、素材に興味を持ってもらうために直売店の展開、工場見学の受け入れ。今後オープンするカフェ併設の新工場の話などをいただいた。

高岡市デザイン・工芸センターの日野氏からは工芸技術の習得を通して、次代を担う人材を養成するものづくり人材養成スクールの話やディレクター指導のもと地元企業が共同で行う産官一体の産地ブランド新商品開発プロジェクトのお話をいただいた。

海外へ仏具の販売を行っている、越境ECコンサルタントの横川氏からは高岡での取引を通じ、問屋の特徴についてお話をいただいた。産地自体が既存のルートを破壊せずに新しい道の模索をしたり、コンソーシアムを組んで新境地を目指す取り組みがあること、輸出を見越した場合の金属の優位性について話があった。

#### □課題Ⅲ：革新を育むまちの雰囲気と土地利用戦略

國本漆器（株）の國本氏からは、伝統産業青年会や高岡まちっこプロジェクトなど異業種による取り組みが活発なこと、デザインや工芸に地域全体で力をいれていること、高岡ファンが集うクラフト市場街やクラフトツーリズムの開催は地元の気づきや意識を高めたこと、空家にクリエイターや学生が住むことでものづくりとまちづくりをつなげる効果があること、などの話をいただいた。

文教大学経営学部教授の梅村氏からは産業集積と内発的な小さな経済づくりの話から自治体としての政策レベルを目指すのか、問いかけがあった。産業振興とまちづくりの取り組みとして板橋区の住工混在地域の地区計画の事例の紹介があった。

### ■全体統括・まとめ

会場からは、問屋とメーカーがチームを組みイノベティブな取り組みがあること、まちが廃れているため中心部から変えていく必要があること、そのためにはまちの中にインパクト、起業のシステムがつくれるかがカギであることなどがあがった。

最後に都市計画家の土井氏からは、高岡市には400年前の鋳物産業から始まり新湊から内陸の川沿いに



ものづくりまちづくり研究会 伊藤 清武

ものづくりまちづくり研究会  
認定NPO 日本都市計画家協会理事

千葉 葉子

成長・蓄積してきたいくつもの創発拠点がありそれが高岡の魅力である反面、産業政策と都市計画がまち全体で見るとバラバラに展開し一体感がないとの指摘があった。このまちがどれだけ豊かになるか、どう魅力をつくっていくかの将来のイメージを共有した中で産業振興やまちづくりに取り組み、外に向けて発信していくことが必要、との話があった。

### ■高岡工業地形成の可能性

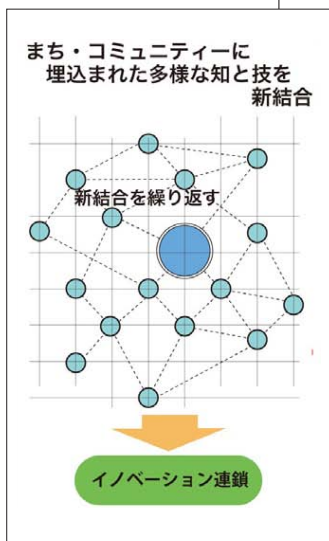
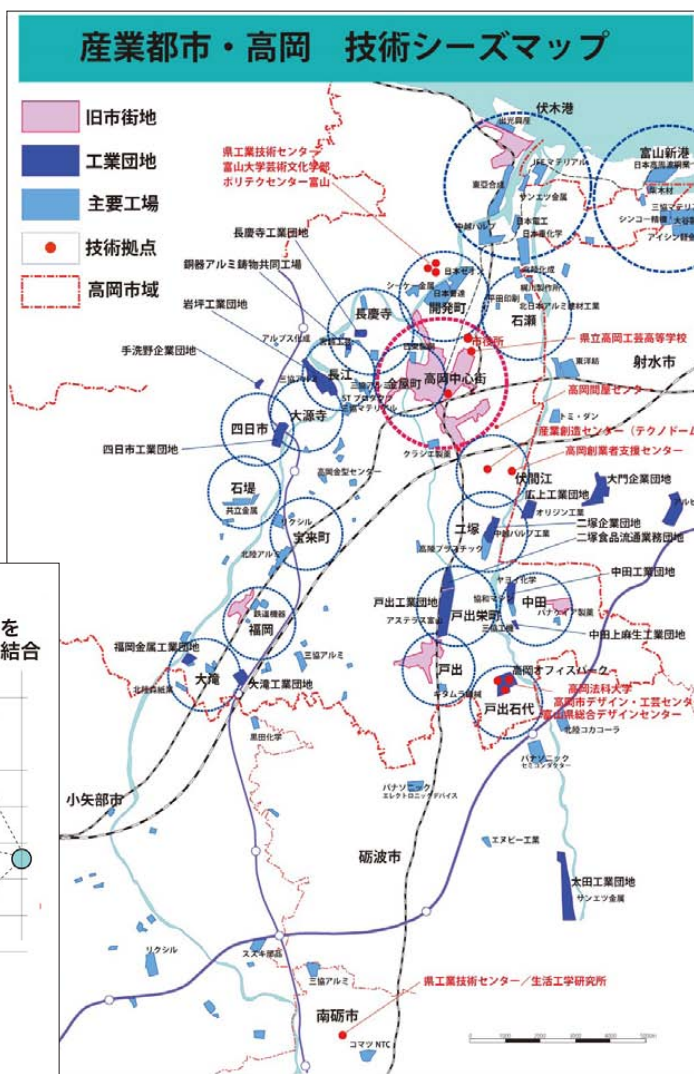
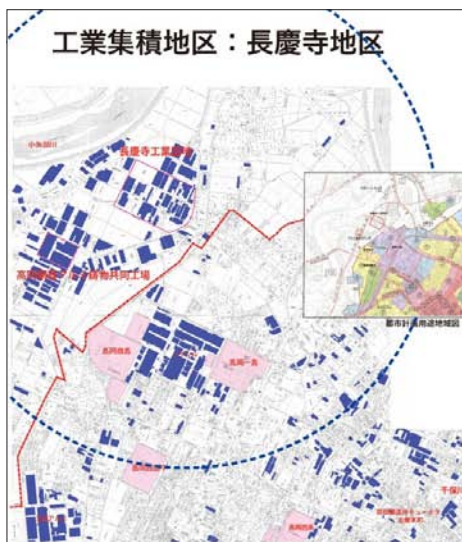
高岡は、およそ400年の歴史を有する鋳物をベースに、銅器、漆器、菅笠など多様な技と知恵を積み重ねてきた。明治期に入って、紡績、ソーダ、肥料、染料、紙などの近代工業が加わり、それらが現在のアルミ建材、薬品、機械部品などへと発展している。

明治期に伏木港、小矢部川沿いに近代工業が数多く進出し、その後、内陸各地に中小規模の工業団地、工場アパートが開発され、それぞれの地区が特色ある工業を育ててきた。右図のように、各地に工場、産業団地、産業支援施設、学術研究機関等が点在している。大規模な工業地区を形成するのではなく、既存市街地に寄り添うように工業地を配置してきた。

このように工場と住宅の近隣関係を維持することによって、日常生活を見守り、相互に支え合う良好なコミュニティが醸成され、まちが職人を育て、技を継承してきたと想像できる。それが高岡の底力である。

今、我が国工業は大きな転換期に直面し、工業地も大きく様変わりを迫られている。住工混合を維持しつつ技を継承してきた高岡工業地は、この新たな転機を迎えて、どう立ち向かうのか。

改めて、まち中に活動拠点を埋め込み、多様な機能を喚起し、新たな関係を構築することによって、まちの力を取り戻すこと、まちの資源を一つ一つ繋ぎ、イノベーションを創発すること、そして職人、技術者、企業、市民を育てるまちづくりを展望したい。高岡には、その検証の場があり、実践を繰り返しながら構築していくことが期待される。



## ～都市計画コンサルタント優良業務登録事業の 試行結果を題材に～



### ●分科会の目的と概要

昨年に続いてejob分科会を501研修室で開催し、1年間の試行結果やアンケートを基に、自治体が発注する際に活用できるデータベースとなり得るような、よりよい事業とするための議論を行った。高岡周辺自治体では富山市・金沢市以外、まだejob事業に協力いただけていないため、さらに基本に戻って、地域の課題及び自治体とコンサルタントのあり方から議論を始めた。

パネリストとして登壇したのは富山県長谷川尚、石川県二塚保之両都市計画課長、富山市舟田安浩都市政策課長、高岡市太田裕之都市創造部次長と、地元コンサルタントである(株)サンワコンサル林博顧問と(株)新日本コンサルタント大門健一都市計画課長、東京からエックス都市研究所佐伯直氏、そして学識経験者として金沢大学中山晶一郎教授の7人だった。ejob事業運営準備会からは進行役に柳沢厚氏、試行結果等報告を佐々木智英氏が担当した。

### ●地域の都市計画上の課題

行政の立場からの課題として、線引きに代わる強力なツールが見いだせない状況で、乱開発を防げるかに疑問があることや、地方都市のインフラの活かし方、特に住宅の社会資本であるニュータウンで世代が偏る問題などについて指摘された。都市マスタープランの見直しの時期にあたって、広域計画から敷衍する分かりやすい説明に難しさがあること、合併に伴う問題やコンパクトシティを目指す方策をデータで示すことで説得するという課題も言われた。新幹線の開通に伴う駅前開発や緑の整備、さらには人口減少が予測される中での連携都市圏の考え方への言及もあった。

### ●都市計画コンサルタントへの期待、自治体の状況

宅建業者やハウスメーカーといった人々でも都市計画の理解が不十分な中、分かりやすい説明をするために言葉だけでなく、データや図案などのツール作成が求められている。コンサルには単なる漫然とした情報収集ではなく、選別して発注内容に沿って活用可能な形にまとめる力、考える力が求められ、そうしたコンサルとしての力量が必要とされる。モデル理論やシミュレーションなどツール提供については、コンサルは時間と予算がないので、大学の役割となるだろうという指摘もあった。

この40年で都市計画を取り巻く環境は大いに変わり、コンサルと行政の関係も、かつての都市行政には「主(ヌシ)」のような人がいて、コンサルに指示をする状況だったのが、人事異動や人材不足、行政の中で都市計画が統括的な地位でなくなっている事情などで、コンサル側に対する期待が増えているようだ。また都市計画の分野が広がっており、都市デザインや都市景観も含めた地元住民との合意形成に誘導を担う難しさはある。



行政とコンサルの関係については、かつて建築職が行政内で自前の設計だったのが、徐々に建築設計は民間でとなったように、都市計画も外部化していくことが考えられるので、行政としては“都市計画マインド”が問われることになるのではないかと。建築指導課の課員が一級建築士を目指すように、認定都市プランナー制度にも、行政マンへの対応が欲しいという話題もあった。

地元コンサルの現状としては交通計画、地域計画、防災計画を3本柱として活動しており、足繫く現地に行かれるメリットを生かし、行政との打ち合わせを密に共に考える形で、「地域のかかりつけ医」といっ

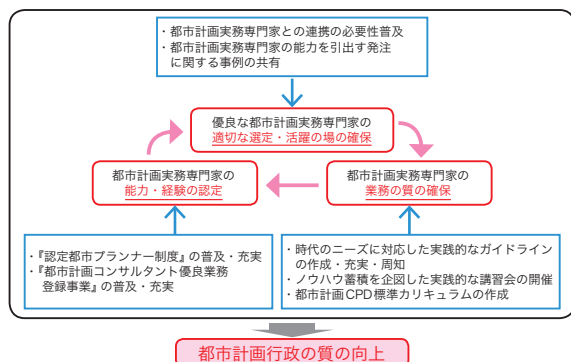
た役割になっていきたいという言葉もあった。

都市計画の人材育成、専門性の向上については、問いかけなど言葉のキャッチボールによる組織内の教育によったり、フランクな打合せの中から問題意識が生まれることがあるので、チャンスを増やすことで成果につなげることができるのではないかと、などの意見が出された。

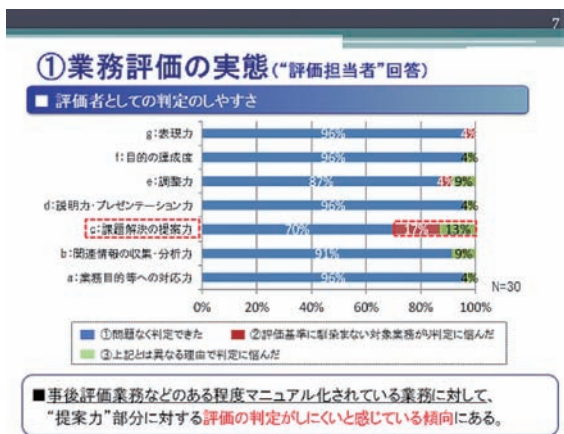
### ●ejob 事業の仕組みと試行結果

都市計画をめぐる状況が、都市域の無秩序な拡大に対応するという従来の役割から変化する中で、コンサルタント業務の質を向上する目安とするために都市計画コンサルタント優良業務登録 (ejob) 事業の仕組みが検討されてきた。都市計画学会、都市計画協会、都市計画コンサルタント協会、都市計画家協会の都市計画4団体が2009年に「適正な発注方式の推進」提言をとりまとめ、その後3年をかけてejob 事業要項案とし、自治体とコンサルタントへのアンケート調査と模擬評価の実施を経て、昨年からは試行を継続している。

質の高い都市計画行政を推進するための好循環



ejob 事業は個々の業務をコンサルの依頼に基づき、自治体担当者が複数で評価し、優良とされたものを公表する仕組みで、コンサルの作業内容について一緒に悩み検討した自治体職員の満足度を客観的に表現することで、コンサルの刺激・励みとなり、発注自治体へ良質な情報提供として適切な発注業務の足掛かりとなり、コンサルタント業務の質的向上となることを目指している。図は国交省の都市計画関連ビジネス研究会報告にあるもので、左下に認定都市プランナー制度と共に記載されている。



協力自治体は2016年8月末段階で6県8政令市7特別区40市2町とまだ100自治体に届かないが、試行評価のデータベース化が進むことにより徐々に拡大しつつある。詳しくは(公財)都市計画協会HP内に掲載されている要項案・要領案、優良業務一覧、協力自治体リストなどを参照されたい。

昨年度は43件の評価依頼を受けて業務評価を実施し、27件を優良業務として公表した。評価は専門技術力、コミュニケーション力、成果の品質の3項目に分類し、業務目的等への対応力、関連情報の収集・分析力、課題解決の提案力、説明力・プレゼンテーション力、調整力、目的の達成度、表現力と7つの視点で評価、5段階評価の4以上で点が得られ、複数評価者を合算後の得点がレベル以上であれば☆がつき、特に優れたものは2つ☆となる。協力自治体に評価経験についてアンケートを行うなどして、来年度の本格実施に向けた改善努力を続けている。

### ●ejob 事業への期待と意見

コンサルとしては☆が付かないと嫌なので担当者は避けたがるが、会社として利用する仕組みがあるといい。認定プランナー制度と共に都市計画全体を押し上げるように、実績を積み上げて欲しいとの意見、またコンサルのレベルを上げる意義があるのではないか、という見解の一方、社内的には忙しくて対応が難しそうだと感想も。制度の意義はあると思うが、形に検討の余地があり、業務内容が端的に分かりやすいといいとの要望。もっと進めて数が欲しい、評価する担当者が悩んでいたのも、基準を簡明にしてももらえるといい、などの発言があった。

## 空き家利活用の新しい展開をめざして

日時・場所：2016.10.16 10:00-12:00  
 @503会議室 ウイング・ウイング高岡  
 パネリスト：服部恵子氏 たかまち鑑定法人(株)、  
 TAKAOKA まちっこPROJECT  
 真野洋介氏 東京工業大学  
 浅海義治氏 富山県氷見市 都市・まちづくり政策監  
 杉崎和久氏 法政大学  
 岡辺重雄氏 福山市立大学  
 コーディネーター：小泉秀樹 都市計画家協会理事、東京大学

当日は、まず、地元高岡で空家再生に関わられていらっしゃる服部さんから、「まちっこ」による空家再生の取り組みの現状・課題について、不動産鑑定士として関わる立場から、報告いただいた。「まちっこ」は若者のまちなか居住推進をメンバー共通の目標として、多様なメンバーで多様な活動を展開しようとしている。具体的には、町家体験型ゲストハウス「ほんまちの家」など空家改修の支援、空家活用の場を利用したイベント開催(蚤の市、子供合宿)、交流会・まちあるきワークショップなどを実施している。

空家再生の課題としては、まず法規制のハードルがあり簡単には活用できない、また現行の法規制に適合させることと、意匠やコストの調整を行うことが難しい(法規制にあわせると高コストになってしまう)、市場流通性の低く物件が出にくいし利用者も見つかりにくい、これらのため「空き家が多い」と「再生できる空き家が多い」は同じではない(例えば、小杉邸は大きすぎて住宅利用は難しいなどの障害もある)、さまざまな魅力が伝わりにくいことから空家再生の魅力発信が重要であること、などがあると考えている。

ついで、真野さんから、研究室による高岡での空家再生支援の取り組みについて紹介された。空家再生によるまちづくりでは、①住み続ける人にとって、住環境の質と持続性を高める、②権利を所有/手放す人にとって、価値と流動性を高める、③住み替える人にとって、ニーズに合う環境を得る、④市民・行政・企業・NPOの連携によって地域の価値と持続性を高める仕組みをつくる、ことが重要と考えている。その上で、マルチレベル(重層的な)の再生ネットワーク構築(個人・所有者/近隣地区/市場・行政・市民)をつくりだす必要がある。こうした視点に立ち、個々の空家再生の取り組みを支援しつつ、これまでの歴史的な取り組み状況を俯瞰的に整理し、また自治会と連携した空家情報集約を含めた地区レベルでの空家活用の取り組みを展開したり、高岡市空き家活用推進協議会(宅建業/建築士/司法書士/家屋調査士/行政 2013年度～ ワークショップを通じた仕組みづくり)などの支援を行ってきている。

ついで、浅海さんから、氷見市での取り組みが紹介された。氷見市では、「危険老朽空き家対策事業」(H24-

で空家の取り壊し・除去を進め、その後「空き家優良物件化支援補助金」(H27-)を用い、空き家の有効活用及び流通の促進を図り、同時に住まい・移住に関する8つの補助制度を組み合わせ空き家再生に取り組んできた。射水市とともに取り組んだ特定地域再生策定事業(H26)では、S25以前の木造伝統軸組工法の全ての建物に加えて、地域資産である民家、納屋、蔵を活用対象として現状把握を行った。さらに、平成27年度には、空き家活用まちづくり事業として旧市街の建物悉皆調査を行い、空家マップの作成、空家所有者へのアンケートによる実態調査、居住者へのインタビュー調査による地域課題の把握などの調査を重層的に行いつつ、空家活動のモデルづくりを進めてきている。今後の展開として、①「まちの将来ビジョン」⇒「空き家活用施策」、②「活用モデル創出」⇒「エリア展開」、③「条例(地域ルール)検討」⇒「一般普及」を考えている。空家や古民家等活用をとりまく課題としては、①複雑な土地と建物関係、②売りたくない貸したくない意識、③200万円以下の売買手数料5%、④店舗は閉じても奥で生活、⑤住み手、使い手の発掘、⑥駐車場確保と景観形成の両立、⑦戸建志向車依存の生活スタイルとの関係(スプロール化と市街地空洞化)、⑧建築基準法の壁(地方公共団体に設ける専門の委員会等による適用除外の検討←建築主事のいる特定行政庁ではない)などがある。

その後、杉崎さんから、京都市東山区六原まちづくり委員会の取組みについて紹介があった。まず、六原学区の空家問題の特徴として、空家は多い、また住みたい人も多いものの、実際に流通している空家のごくわずかである、等がある。六原学区のまちづくり活動は、学校の統廃合問題から始まったこと、学術・行政の調査に地元が協力するなかで空家問題が確認認識されたこと、当初は空き家対策を行政主導でスタートし行政事業終了後も地元組織で自走して対策を実施している。そして、地元組織が、予防啓発から活用流通まで幅広い活動を、しかし諸種の工夫により負担の少ない形で無理なく実施している。その後、空き家流通の具体事例について、掘り起こし、片付け、借り手探し・改修提案・改修、活用の、プロセスに沿って説明があった。その中で、地域組織の丁寧な所有者とのやり取りから、家の片付けが困難なことが流通阻害要因であることを発見し、また借り手探しと改修費用負担については、芸術家支援団体HAPSや行政とも協働して実現している。今後の課題として「継続性」、具体的には、活動資金の持続的な捻出、自治会ベースゆえの組織運営の難しさ、地域内の人材確保などがある。

最後に、岡辺さんから、実施の空家等活用・再生の実践事例の紹介のあと、地方都市の既成市街地・旧市街地における空家活用に関連した建築基準法上の課題に

## 高岡での 実践者 から

たかまち鑑定法人株式会社 代表取締役

服部 恵子

認定NPO 日本都市計画家協会理事  
東京大学

小泉秀樹

ついて説明があった。古い(歴史的な)建築物は主に既存不適格であること、既存不適格の場合、確認申請が必要となる増改築等、用途変更の場合には、現行法規制への適合が求められる。また、建築基準法第3条1項三号(保存建築物に対する命令及び条例の適用除外)は、かつては建築審査会の個別審査による指定のハードルが高かった。しかし、国交省による技術的助言(国住指第1号平成26年4月1日)が行われ、より運用が容易になりつつある\*1。建築基準法第3条1項三号の運用拡大のポイントとして、1.文化財保護法条例の対応により市民から申出があった建物を保存建築物に登録できること、2.構造安全、防火基準への「配慮」の程度について審査会の同意基準を実質化すること、3.専門家等の審査による調整の仕組みづくり、4.専門家等の審査を建築審査会同意とみなすことの明文化規定が必要、などが必要である。

その後、フロアを交えたディスカッションが行われた。自治組織が空家再生の取り組みについて大学などの域外組織との連携をどのように行っているのか、地方都市の空家再生において、利用者を後押しする中間支援組織の仕組み(鶴岡市のランドバンク)、金屋町における取り組みについての紹介(伝建地区、空家をそもそも作らない、次世代の若い人との取り組み、城下町などの歴史性に根付いた魅力作り、すぐに入れる家がほぼない→費用を専門家が策定、写真だけではわからない高岡市のコミュニティを理解させたい→移住型体験施設を作っているが挫折(建築基準法に引っかかる))があった。そこでも問題になった基準法の特例許可について「実質配慮」の具体的な積み上げの工夫(性能リスクの明示は必要だが、現行法との同一性能は必ずしも求めないなど)に関する議論、他の事業との連携的取り組みの必要性(京都市の密集事業、水見市の福祉事業)などに関して議論が行われた。

最後に、流通可能性を高める空家の存在状況の確認や個別事例に対する支援、地区レベルでの集中的な取り組みなど、異なるレイヤー、領域について総合的に支援を進める中間支援の機能を、地域の特性やこれまでの取り組みを踏まえつつ、自治体ごとに充実させることが必要であることが確認された。

\*1技術的助言の内容は、地方公共団体は建築審査会の同意のための基準を定め、専門家委員会等が同意基準に適合すると認めた場合は、審査会同意があったものと看做すこと、さらには国として判断基準は地域の実情等を踏まえ対応し、一般に(1)条例で定められた現状変更の規制及び保存のための措置が講じられていること。(2)建築物の構法、利用形態、維持管理条件、周辺環境等に応じ、地震等の構造安全性の確保に配慮されていること。(3)防火上支障がないよう、出火防止、火災拡大防止、近隣への延焼防止及び消防活動の円滑性の確保に配慮されていること。(4)在館者の避難安全の確保に配慮されていること、の4つを基準すること、である。

### ●発表の目論みと背景

今回登壇のお話を頂いた際に日頃の考えを整理した。

まず空き家(ここで云う「空き家」とは主に既存市街地内に存する市場性の無い又は乏しい「その他の空き家」)に関心を持つ人の裾野を拡げたい。空き家活用とは関心の高いごく一部の人の特殊な活動ではなく誰でも関心の程度に応じて関与可能であり決して他人事ではない事を伝えたい。

特に古い建物を利活用するには多くの法的ハードルがある。その一方で市場流通性の低さも感じている。空き家の数と活用可能な空き家の数は全く一致しない。

現在私の周辺で起こっている空き家活用は、ご縁や偶然出会った空き家について活用可能なプランを設計実行しているケースが多く、結果的に法規制の面で多くの知恵を要する。利用ありきではなく建物ありきなのが現実で建物の御都合で利用が制限されたり多額のコストを要したりする。

不動産が復元や保存主眼の高コスト物件ではなく、ビジネススペースや、利用者に夢や希望を提供しながら経済的に自走する為には上記に挙げた課題を乗り越える必要があると考えている。また、周囲の様々な人・機能が「空き家活用」に向けて各々の立場で出来る範囲で関わり続ける事が推進力の一助となる。

そんな事を考えながら当日の発表内容を考えた。

### ●当日の様子

発表では、自身の活動だけではなく、この活動を通して知り合った尊敬する方たちの取組を共に発表した。冠が「全国まちづくり会議」とあり全国から聴衆が来られる事を想定して「チーム高岡」で挑んだつもりだった。

紹介した他のプロジェクトの皆さん、日頃から関心の高い専門家や学生さん、行政の担当部署の方も揃い、正に会場全体で自分事として空き家活用について考える機会だったと思う。

狭いフィールドで活動している私からの狭い視野での問題提起について、登壇者の専門家の諸先生方からは、ご自身の活動の中から正に現在の高岡に必要なエッセンスを事例等交えながらお伝え頂いた。柔らかい口調で軽快にお話しになられたが、その内容は鋭いものであり聴講者の心にも深く刺さったのではないかと思っている。

## ～まちにかかわる場の創造から始める まちなか再生～

### ■フォーラムの趣旨

働く場、遊ぶ場、暮らしの場としての“まちなか”の再生が叫ばれ続けている中で、近年、地域の人々が自ら動き、小さな取り組みを積み重ねていくことによって着実に“まちなか”に変化を生み出している事例が出つつある。

これらの取り組みはリノベーションやエアーマネジメント、プレイスメイキングなどといった言葉で行われているが、それらの本旨は、まちにかかわる場や機会を作り、まちの人々の力を結集することによって再生を進めるという事なのではないかと考える。

今回のフォーラムでは、まちにかかわる場や人づくりについての事例を学びつつ、そのような場を高岡市の“まちなか”でどのように展開していけるのかについて議論を進めた。

### ■フォーラムの内容

フォーラムでは、筆者がコーディネーターを務め、冒頭に、エアーマネジメントや地域自治の仕組みなどについての研究や実践を行っている法政大学の保井美樹教授から問題提起として、プレゼンテーションを行って頂いた。

保井先生からは「コモンズ空間を創り、豊かに使う人材と仕組み」と題した問題提起をして頂いた。まちの使い手である住民が場づくりに参画することの重要性や価値について提起して頂いた上で、多様なステークホルダーの力を総合化する仕組みとしてのエアーマネジメントについて解説をして頂いた。

保井先生からの問題提起の後に各地で実践を進める方からプレゼンテーションを行って頂いた。

<森山 奈美氏>

森山氏は石川県七尾市の中心市街地で活動する株式会社御祓川の代表取締役として、中心市街地の再生に尽力されており、その中のいくつかのプロジェクトを紹介頂いた。

特に印象的だったのが、北陸銀行だった建物のリノベーションプロジェクトについてである。改修後にBancoと名付けられたプロジェクトは、実際の改修作業を学生と共に進め、現在はコワーキングスペースや人材育成の場（御祓川大学）として使われている。

リノベーションというプロジェクトがまちにかかわ

るきっかけを創り、そして継続的にまちにかかわる場を生み出し、そこからまちを支える人材も生み出す仕組みを動かしているという点で、非常に参考となる取り組みの紹介であった。

<園田 聡氏>

園田氏からは、プレイスメイキングについて紹介をして頂いた。プレイスメイキングに関する理論的な解説をして頂いた上で、氏がかかわる愛知県豊田市の事例について紹介頂いた。

「あそべるとよたプロジェクト」と題した取り組みは空間を「つくる」と「つかう」を両輪で進めていくために、実験的にまちなかを“つかい”、その成果を“つくる”に活かすことを進めている。

そして、この取組での評価指標として人の数では無く、アクティビティの多様性を取り上げている所に特徴があるように感じた。

単にまちに来るという事だけでは無く、そこでどのようなアクティビティが展開されているのかが“まちなか”に変化を与える上で重要な視点になるという事が提示されたのではないかと考える。

<楠 達男氏>

楠氏は、高岡市の中心市街地活性化を担うTMOである末広開発株式会社に所属されており、中心市街地活性化に向けた末広開発の様々な事業内容等について紹介をして頂いた。

特に、歴史的資産を活かした町家再生事業を進められており、これを中心に取り組みを紹介して頂いた。

高岡市には重要伝統的建造物群保存地区が2地区指定されており、その内の一つの山町筋と言われる地区で取り組みが進められている。現在進行中のプロジェクトとして、「旧谷道家」のリノベーションプロジェクトを紹介頂いたが、単に観光の拠点とするのではなく、多様な世代、性別の地域住民が交流する「場」としての整備を目指しており、地域住民を巻き込んだ活用ワークショップを行うなど、使い手が参画する場づくりが進められている。

なお、山町筋の取り組みについては末広開発の瀧根氏から寄稿して頂いたので、併せて参照をお願いする。

<加納 亮介氏>

加納氏は東京の大学でまちづくりを学ぶ学生であるが、高岡市に住み着き、空家を改修し、「ほんまちの家」

## 高岡での 実践者 から

まちづくり会社・末広開発(株)

瀧根 智志

認定NPO 日本都市計画家協会理事  
株式会社 フロントヤード

長谷川 隆三

というゲストハウスを運営している若者である。

プレゼンテーションでは、高岡でゲストハウスを運営するきっかけやゲストハウスでの活動についてご紹介頂いたが、活動を進めていく中で、「地域の方との信頼関係を築く」ことの重要性について強調されていたのが印象的である。

### ■まとめ

それぞれの事例紹介の後にディスカッションを行う予定であったが、各プレゼンターの熱いプレゼンテーションが続き、ディスカッションに当てる時間が無くなってしまいコーディネーターとしては反省すべき所であるが、各事例やプレゼンターの思いからいくつかの示唆が上げられたと思う。

一点目として、「まちの使い手の参画による場づくりの重要性」である。保井先生の問題提起でも述べられたが、各事例からもそれが立証されたと考える。それぞれの事例で場の使い手となる人々が場づくりから参画することが紹介されたが、それによって、その場・プロジェクトが自分事になり、うまくプロジェクトが回転していくのではないかと考える。

二点目として、「多様な関係者をフラットにつなぐ中間支援者の存在」である。一つのプロジェクトを進めていく上で多くの関係者がかかわることとなるが、コンセプトの共有や各種調整が必要となり、それらをコーディネートしていく役割が非常に重要になると考えられる。

三点目として、加納氏も強調していたが、「日常的なつながりと信頼関係の構築」である。保井先生の問題提起でも社会関係資本という事の重要性が述べられていたが、まさに社会関係資本を如何に作るかがまちにかかわる人を増やし、様々なアクティビティを生み出すことにつながるのではないかと考える。

最後に、筆者は全まちの前に行われていたクラフト市の見学をさせて頂いた。歴史的な建物という資源を使いながら、まちの中にアクティビティを生み出しており、それらの活動をより日常化していくことがまちなかの再生につながるのではないかと考えた。是非、今回のフォーラムでの気づきを活用して頂ければ幸いである。



歴史と伝統のある山町筋に在する未利用物件を「山町ヴァレー」と称して再生活用事業に取り組み、現在施設整備を進めているところです。

物件としては、明治期の町家と土蔵(5棟)、昭和初期に新築された木造3階建ての洋館造りの建物を修理・改修して複数のテナント区画として提供しつつ、座敷の一部や中庭は、共有空間として利用する計画です。伝建地区に指定されていることもあり、整備後の景観は現在のものとほぼ変わりませんが、土蔵造りの町並みが残る山町筋にある洋館の3階建ては、地域住民にとって江戸時代から高岡の地でまちづくりや賑わいを継続してきた現代の人々の記憶にも鮮やかに残っています。

山町筋は、開町以来様々な商取引やものづくり、情報交換等により高岡の繁栄を支えてきました。明治期の大火により消失した際、防火機能の高い土蔵造りの町家を再建できたのも、商いの基幹や町衆文化の継承があったからと考えます。くわえて山町ヴァレーは、自ら営業や居住する所有形態から所有と運営、交流を分離して管理する形態となり、新たに起業する方々や催事等で交流を促進する方々が山町筋で活動することになります。

その際、個々の営業方針や施設の管理方針だけでは対応できない場面が多々予見されます。伝統的な祭礼や習慣、賑わい創出に係るイベント企画など山町筋で独自に継続している取り組みも多岐にわたることから、山町ヴァレーは、これらの出会いと交流を促す場所として、また歴史的環境を共有・体感できる場所として利用することが大前提です。

こうした人々との交流、情報交換の活性化を目指す「場」として、出店者や運営会社、地域住民等が一体となって町並みの継承や賑わい創出にたずさわる「基幹」として再生を図り、まちづくりに寄与します。また、物件の再生活用に係る修理・改修について継続的に取り組むことも求められます。

再生活用事業の完了後は、場や基幹ができたからこそ積極的にコミュニケーションを形成しつつ、経過観察や課題を整理した上で、維持・保守に係る修理はもちろん、催事等の円滑な運営や利活用に係る変更・改修等も適宜、行いながら、活用事業を企画・実施していく必要があります。

## 東日本大震災今までとこれから

### ■登壇者

富士川一裕(JSURP九州支部)

神谷秀美(JSURP 震災復興TF)

島田修(足立区役所)

加藤孝明(JSURP 震災復興TF)

小泉秀樹(JSURP 震災復興TF)

高鍋剛(JSURP 震災復興TF・進行)

今回の復興まちづくりフォーラムは、東日本大震災から5年半経過した時点で、これまでの復興の過程をきちんと振り返り、今後の展望を議論しようという趣旨で開催した。また、本年発災した熊本地震の経験を共有するとともに、今後地震災害の可能性もある高岡においても1つの教訓にしておらおうと考えたものだ。

また今回の議論を行うにあたり、会議直前に発行されたプランナーズ83号は、「東北復興特集」であり、これを題材としながらフォーラムを進めた。

この特集号を編集する過程では、昨年2月より4回の意見交換、WSを実施し、個々の経験を「共有知」にすべく進めてきたものだ。しかし、本質的な課題は何か、今後何をしていけばいいのか、できるのかについては、そう簡単にまとまるわけではないことを参加者の多くが実感したプロセスでもあった。

### ■報告1 熊本地震の報告(富士川一裕)

まず富士川氏からは熊本地震からの復興の現在について、城下町エリアの状況について報告があった。城下町エリアは木造の歴史的な建造物も多く、建物倒壊被害はとりわけ歴史的・街並み的な価値を有する建物に集中した印象があるが、この地域における復興への取り組みは早かった。地域社会が機能しており、これまでもまちづくりの議論を積み重ねてきた経験があるからだ。この点が東北の場合と大きく違うことをまず参加者は実感した。

城下町の復興のビジョンは以下の3つだという。

- ①多層な街という特徴を活かす
  - ②記憶の継承を大切に
  - ③心のライフラインとして歴史的景観を尊重する
- このようなビジョンがすぐに合意される地域の強

さがある。また、景観は「心のライフライン」である、という言葉が東北復興に関わるメンバーの心に響いた。



### ■報告2 東北復興のこれまでとこれから(高鍋剛、神谷秀美)

次に東北復興に関して、プランナーズ83号の各記事のサマリーを見ながら2人から報告を行った。前半のこれまでの部分では、復興のビジョンや全体像の不透明さや、主体間コミュニケーションの問題、さらには復興計画そのものの仕組みや構成のあり方の問題などが指摘された。

また、これからの部分では、これまでの色々な動きから見えてくる「光」にクローズアップし、被災した低地の土地利用、地域のマネジメント、新しい担い手の出現、震災を契機とした産業創造、NPOなどの市民活動の展望などについて報告されたが、行政主導のマクロな取り組みからというよりも、個々の地区での実践や試行錯誤の中から、新しい希望が見えてきたということが言えるだろう。

### ■セッション

2つの報告を踏まえ、以下の2つのテーマで意見交換を行った。

#### ①ビジョンのあり方

まず、熊本の城下町のエリアでは比較的早期の段階で、住民により「ビジョン」が共有されたことから議論が展開し、東北の場合なぜ、このようなビジョ



ンが形成されにくかったかを問い直した。

1つには、復興事業の担当課はあったが、被災地全体のビジョン形成を担う担当課がなかったこと。この結果ビジョンに向けた復興ではなく、事業の調整に力点が置かれた。2つ目には、行政サイドがこの基盤整備そのものがビジョンであると考えていたこと。3つ目にはビジョンを検討すべき住民がバラバラに仮設に居住していたこと。4つ目には、東北の多くの地域では住民が主体的に参加するまちづくりの経験や土壌がなかったことが挙げられた。

また、これまでの復興支援の経過を振り返ると、やはり多様な主体が共有できるビジョンを形成する必要があること、さらに言えば空間のみでなく「暮らしのビジョン」が必要であることが確認されたが、我々外部の専門家の役割として、ビジョン形成する過程において被災者の力を引き出す工夫や必要なビジョンを形成する助言が十分ではなかったのではないかとのお話もあった。

そして、地域のビジョンは「心のライフライン」という富士川氏の発言が皆心の中に強く残った。

## ②プランニングのあり方

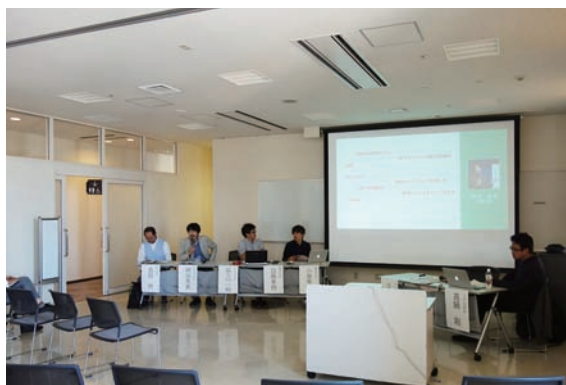
次にプランニングのそのもののあり方についての議論があった。加藤は今回の東北の復興は、「遅れてきた20世紀型プランニング」だったと指摘し、その背景には、阪神淡路大震災の経験を継承した専門家が中枢に入っていなかったことがあることを挙げた。

また、今回のように復興のプロセスが長期にわたる場合には、空間復興のプロセスとは別に、「過渡期のやりくりの仕方」のプランニングが必要との話が確認された。避難所から仮設住宅に移る過程、仮設住宅から本設住宅への過程など、様々な過渡期にどう対応していくかも重要である。

さらに、小泉はプランニングのプロセスに関しては、「オープンプロセス」によることが必要と指摘し、それを実現するためには、プランニングそのものの発想の転換が必要であると同時に、多様な主体がゆるやかに共有したビジョンのもとにそれぞれの主体（地域やNPOなど）が勝手に行動を起こす、そのきっかけとしてのビジョンであることが重要であると述べた。

気仙沼市に派遣経験のある島田は、「足立区地区環境整備計画」の事例を挙げ、何が起きても方針を決められる強さや地域の合意は、平時に十分に話し合われた方針を持っていることから生まれると指摘し、平時の取り組みこそが重要であることを確認した。

また加藤は、災害に関しては事前に準備できることがあり、それは「地域の課題の把握」、それを踏まえた「ビジョン形成」であるとし、やるべき事は比較的シンプルだとした。これに対し小泉は、それがなかなかできない背景には、現代の計画システムの複雑化があるとし、要するに部門別マスタープランの登場により、行政にもプランナーにもビジョンや計画を総合化する能力がなくなってきたのではないかと指摘した。



## ■とりまとめ（加藤）

最後に加藤が総括した。今回のセッションでは「ビジョン」という言葉が注目されたが、実は当の住民には「ビジョン」という言葉はやや意味不明な言葉として受け止められていたのではないかと、とした上で、熊本で共有されたビジョンは「心のライフライン」、すなわち、住民の主体性や前向きな力を喚起するためのものであると整理した。ビジョンが人の気持ちを動かすものでなくてはならないということである。

また、今後発生する各地の復興に関して、我々専門家の役割は「復興準備」であり、今回の教訓を踏まえた施策や制度の提案であるとした。

また、現代は昔のようなカリスマ的なスーパープランナーのいない時代であることを前提とした計画理論、制度設計が必要であるとして、セッションを締めくくった。

特別講演+鼎談

# 伝統工芸や芸術文化を創造的なまちづくりに活かすために ～世界と日本の創造都市に向けた取組事例から～

特別講演 佐々木 雅幸(同志社大学経済学部教授)  
鼎談 佐々木 雅幸  
保井 美樹(法政大学現代福祉学部教授)  
小林 英嗣(北海道大学名誉教授)

## ●はじめに

特別講演および鼎談が本年度の全国まちづくり会議の最後のセッションとなった。佐々木雅幸先生は創造都市の第一人者として、文化庁・文化芸術創造都市振興室長も務められ、国内外で活躍されている。高岡市においては2013年より文化創造都市高岡推進懇話会のアドバイザーとして関わっておられる。保井美樹先生は地域のまちづくり関係者による地域の主体的な課題解決と価値向上の取組みであるエリアマネジメントを推進され、全国のまちづくりの現場で実践的に関わっておられる。

本鼎談では家協会の小林英嗣会長がお二人の話をリードする形で進められ、草の根まちづくりのあり方について共有する場となった。

## ●「特別講演」～創造都市・高岡をめざして～

創造都市とは、「市民一人一人が創造的に、働き、暮らし、活動する都市」のことである。

フランスのナント市では、工場跡地を劇場やアートセンターに再生したり、子どもから大人まで楽しめる音楽祭「ラ・フォル・ジュルネ」を開催するなど、アートイベントがコンサートホールのような特別な場だけでなく、市民生活に近いところで展開されている。また、造船所跡地のアート・学術センターに誘致した、巨大人形を創作するクリエイター集団「ラ・マシ」は、世界中で公演を行い、各地で熱狂を引き起こした。

これらは、文化を中心とした都市政策を公約として当選したジャン＝マルク・エロー市長の強力なリーダーシップにより実行され、文化パッケージとしてナント市が世界に発信できる産業に育って若者の雇用を生み出している。

創造都市政策論の先駆けであるチャールズ・ランドリーは、製造業等の従来型産業から創造産業への転換により「文化芸術の産業化により雇用が生まれる」「文化により都市のアイデンティティを確固たるものにできる」「地域伝統文化と新しい文化の調和や摩擦により文化が発展する」という。

ナント市では、まさにこの創造都市政策を実践し、市民の創造性を発揮できる場をつくり、その担い手を育て、そこでイノベーション(新たな技術革新や価値創造)とインプロビゼーション(即興性のある創造活動)が起こっている。

英国では、文化・スポーツ・メディア省が創造産業を「個人の創造性、スキル、才能を源泉として、知的財産権の活用を通じて富と雇用を創造する可能性をもつ

た産業群」と定義して、ロンドンには「クリエイティブ・ロンドン」と称する創造産業による雇用拡大、都市再生、人材育成を推進した。2012年のロンドンオリンピックに際し、カルチュラルオリンピアドとして英国全土で4300万人の市民が参加する18万件の文化イベントを開催し大成功を収めた。日本でも、東京オリンピック2020に向けて、ロンドンを凌ぐ20万件のアートイベントの実施に向けて動き出したところである。

国連においても創造都市に向けた動きがみられる。UNCTAD(国連貿易開発会議)の創造経済レポートでは、グリーン経済と創造経済が交わる場所に今後の発展の可能性があるとしている。これまでの工業経済の下では大量生産、大量消費、大量メディアを基盤とした産業都市を目指したが、創造経済においてはフレキシブル生産、文化消費、ソーシャルメディアに支えられる創造都市を目指す。UNESCO(国際連合教育科学文化機関)では、金融経済のグローバル化が文化の画一化を引き起こすとの懸念から、2004年に創造都市ネットワークを立ち上げ、現在までに世界116都市が創造都市に認定されている。

イタリアのボローニャも創造都市ネットワークの都市の1つである。ボローニャ大学は大学発祥の地であり、中世に世界中から学生が集まった。大学正面にヴェルディ、ロッシーニが活躍したオペラハウスがあり、まちなかでは、都市計画にて伝統工芸を行う職人があつまる地域が保全され、一点もののクラフト・工芸品をつくる職人が多数働いている。かつての株式取引所は図書館となるなど知的な空間も充実している。都市周辺においてもランボルギーニ、フェラーリ、ドゥカティといった大量生産とは一線を画した高級車が生産されている。

オペラはラテン語で「創造的な仕事」という意味であり、職人の仕事もオペラである。また、イタリアでは障がい者、ホームレスまでもコーペラティブパソシアレ(社会的協同組合)を通じて農業、演劇などの創造的な仕事に関わる仕組みがある。

高岡にも歴史文化、伝統工芸、大学があり、創造都市の実現に向けた高いポテンシャルを有している。ソーシャルキャピタルを基礎にした住民参加を通して、誰もが創造性を発揮できるような仕組みづくりを行うことと、個人・組織・都市の創造性を重視し関係者のネットワークを拡げることが重要である。

創造都市ネットワーク日本は、全国84自治体が加盟し、東京オリンピックに向けた文化活動の推進役となると考えている。高岡市もその中の一翼を担うことを期待している。

## ●鼎談

小林先生：現在、都市や共同体が国際社会の中で自律

中塚 高士  
一般社団法人 RCF

的に連携している「新しい中世」とも呼ばれる状況である。高岡は豊かな歴史資源もある一方で、高度成長期につくられた衰退しつつあるエリアや開発途上のエリアもある。このような状況の中で、どのように人間的・創造的な都市に移行していくのか「都市の進化」の観点から考えたい。

**保井先生：**東京の大丸有（大手町、丸の内、有楽町）は日本を代表するオフィス街であるが、不動産開発に際して様々な企業や団体による協議会が立ち上がり、土日も楽しめるアメニティ重視のまちづくり実現を目指し、実践的な活動を行っている。

札幌では駅前の地下歩道整備に際して、運営管理や利活用を担うまちづくり会社が立ち上がった。地下広場空間で盆踊り等の様々なアクティビティを開催し、地元住民や企業を巻き込みながら運営され、収益は地域に還元されている。

このように、ハード整備が行われるタイミングを上手く活かして、行政や事業者だけでなく市民とともに新しいパブリックを担う公民連携型の組織づくりが行われている。さらに、その組織は単に自立するだけでなく、お金を稼ぎ、利益を地域に還元している。高岡は新幹線駅ができてハード整備が進む時期にあり、新たなまちづくりを考える絶好の時期である。

公共事業は行政や事業者だけで進めることができるが、定常時に地域を運営し魅力を育むためには、関係者の時間と空間を超えた連携が必要になる。専門家を含む関係者がゆるやかにつながる仕組みをつくり、オープンに運営することが大事である。さらに、建物や街並みのハード整備だけでなく、シビックプライドを育む小さな活動が継続されていることが重要である。

ローカルなつながりの場、対話の場、合意できる仕組み、活動を進めるための体制、財源、人々が楽しむ場づくりなどに、着実に取り組むことにより、空き家、空き店舗、廃校等の身近な空間が少しずつ変わっていく。

**佐々木先生：**「都市を進化」させるためには多くの担い手が必要である。近年の創造都市論での「人々の多様性が創造性を生み出す」という考え方にも通じる。「新しい中世」の考え方と同時期に、日本ではNPOやエリアマネジメント、イタリアではコーペレティーバソシアレの仕組みが始まった。ソーシャルセクターによる経済ネットワークがグローバル経済をどのように変えていくのかも創造都市における関心事の1つである。

**小林先生：**講演のなかで、グリーン経済と創造産業が交わるところに発展の可能性があるとの話があったが、近代的な生産基盤、生活基盤とは異なる「生きていくための安心感を支える生命基盤」が求められていると感じる。

都道府県の幸福度ランキングをみると、1位福井、2位富山、3位石川となっており、一人当たり県民総生産の都道府県順位とは全く違う傾向がある。生命基盤の安定が都市や地域の価値につながるのではないかと。つまり、まちづくりにおいても経済性のみ重視する考え方では行き詰まることは明白であり、「プレイスメイキング」のような取組みを通じて、まちの居心地を良いものにしていくことが重要ではないか。

**保井先生：**「タクティカル・アーバニズム」という、実証実験を行いながら実際のまちの形を考えていくまちづくり手法がある。都市住民が与えられたまちの中で、家と職場と学校の往復しかしないのではなく、自ら場づくりに関わることで、地域の身近な空間をクリエイティブな場に変えていける可能性がある。

高岡は伝統的な街並みが残り、エリアの価値が線や面として見える。また、地域のまちづくり活動を盛り上げる人もおり、凄い価値があると感じる。多くの方が忘れてしまっているまちの価値をそこで暮らす人を通して、発信していくことが大事ではないか。

**佐々木先生：**生命基盤の安定はとても重要で、生命の輝きがアートにもつながる。北陸は、持ち家率も高く住居空間も広い。生活空間が狭いと、絵画や工芸品を置く場所がなく買えないため、違いの分かる消費者が育たず、結局ブランド品を買ってしまう。時空間の豊かさは芸術発展の基礎であり、北陸型の創造都市でモデルをつくりたい。

**小林先生：**高岡では、多様なまちづくり活動が既に行われている。まちづくりの歯車が上手く回りだすと、国内外から注目され、人や投資が集まってくる。高岡の「都市の進化」に必要なしくみや態勢を構築し、高岡のまちづくりの物語を市民自身がつくっていくことが大事だ。

## ●まとめ

世界的な創造都市のムーブメントと、エリアマネジメントの拡がりとは、新たな地域づくりの原動力として行政や企業とともに、市民の主体性・創造性を引き出していくという思想的な共通点を持っている。

英国のEU離脱や米国大統領選の結果は、行き過ぎたグローバル化の反動によるナショナリズムの顕れとの見方があるが、裏返せば人々がアイデンティティを国家に求めた帰結と言える。

しかし、人々は帰属意識をもつのは、国家よりも都市や農村、地域コミュニティといった身近なスケールではないか。

草の根まちづくりとは、手の届く身近なスケールの空間の中で、市民による主体性や創造性を触発し、関係主体の有機的な連携を深めていくことを通じ、市民の手の中に自分たちのまちや生活を取り戻していくことなのだ。

ワークショップ

2016.10.8-10

## きっと、会ったことのない、誰かのため(に)

展示・プロジェクト

2016.10.15-16

## 高岡・イリュージョン

「そう言うけど…、充ちゃん、暮し、てそんなもんやわ。誰かの世話したり、手伝いしたりして…自分ひとりの暮らし、て、あるものやろか。」ありますやろ、と充江はきっぱりと応える。叔母は、思いに沈みこむような深い声で、「そうやろか。じぶんひとりのため、ともよう言いきらん。そやけど、誰のため、いうて…きっと会うたこともない、誰かのため、かも知れんわねえ。」

『青桐』木崎さと子 1985

高岡の田園地帯、西藤平蔵という場を舞台に叔母を看取る主人公の視点を通し、失われて行く旧家を描いたこの芥川賞受賞作品で、「人の生きる証しとは、他者と関わりながら、これから生まれて来る人、今まで会ったことのない人のことを思うことではないか」、というやりとりに言いようのない感銘を受け、それがおそらくは都市プランナーのめざすものにも重なりはしないか、ささやかだけれど、そんな言葉が生み出された土地の人たちと一緒に何かできれば…。それが高岡におけるプロジェクトのきっかけだった。

### 「私には、ここ(富山)しかない」\*1

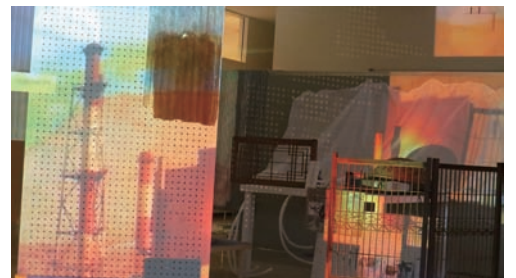
プロジェクト前半のワークショップは全まち一週間前に3日間開催、そして期間中の2日間に展示という2部構成のプログラム。ワークショップの方法論は、高岡が描かれた作品(映画・文学・アニメ・マンガなど)を高岡内外の人々の唯一の拠り所(インターフェース)として介在させ、何かささやかな都市ビジョンのようなものを一緒に見出すために、皆で語り合い、解釈し、参加者の表現スキルは問題にせず、むしろ、どう感じるかを、それぞれのやり方で表現してもらおう試みだ。

その結果、例えば、これまで70年以上もの間、高岡で暮し続けた男性は、今回、藤子不二雄の『マンガ道』に始めて接し、そこから自分の幼年時代の活気ある高岡の町の様子を思い出して語ってくれたうえで数首の川柳で表現してくれた。また、一度東京暮らしの経験のある若い女性は、「私には、ここ(富山)しかない」という言葉を否定しつつも、ワークショップの中から、思いがけない発見をして、高岡の見方が変わった、という印象を表現してくれた。参加者はそれぞれのやり方で、これらの素材からの連想をへて内在するものを抽出してくれた。

### 「変化は、ゆらぎから生まれる」\*2

展示：高岡・イリュージョンは、当初、たんにワークショップ結果発表と捉えていたが、皆で意見を出し合い、まちの印象を加えたものをインスタレーションとして三次元的に組上げる方法にした。具体的には、参加者の作品を生かしつつ、アサンブラージュ(コラージュの立体版)をブリコラージュ(日曜大工的)というやり方による構成。富山出身の美術家・瀧口修造のデカルコマニー(転写)の要素も加えた。

テーマの“高岡・イリュージョン”とは、高岡で見られる、



## 緒方 恵一

シネマティック・アーキテクチャ東京 ディレクター



時の流れを感じさせる、美しく風化した建築素材(weathered materials)、24時間立ち上るパルプ工場の煙突の白い煙、町工場から途切れ途切りに聞こえて来る音、映画の中で描かれた数々の幻影の場所、木崎さと子の『楼門』に登場するゴースト、『鶴のいた庭』で堀田善衛がかつて見た高岡伏木湾の蟹気楼、数年前まで駅前に存在したスペイン人建築家ミラレスの巨大なオブジェ、また、古くは約6年と短命だったにもかかわらず、400年も過ぎた今もまちの人々の心に根付く高岡城など、人の感性に呼応するような“幻影”に思いを抱かせるまち、そういった“イリュージョン”がワークショップ時から共通項として自然に現れ出て来たことによるもの。そして、“幻影”はやがて、地元の方々の協力を得て老舗旅館だった大野屋壁面への一過的なプロジェクション・マッピング(9/15開催)という都市イベントへと展開、具現化された…。そういった、ゆらぎ(参加者の意見の響き合い)を受け止めながら変化して行く展示やイベントを皆が享受した。

### 「好きやねん 高岡なんて とっても!」\*3

今回、高岡で活動する人々と交流しながらまちの意味を考え社会的行為を成し遂げる、という試みで良かったのは、参加者の感性の柔らかさに触れたことや、自分の住む町を別の角度から見て面白がってくれた方々がいたこと(それが、プロジェクション・イベントへと発展した)。また様々な人が会場を訪れ、関わってくれ、お話を伺い交流が広がったことであり、また排他的でもなく、我々のようなユニークな試みにも興味を示して下さる方々が、行政の方含めて多かったことは意外で、正直に嬉しかった。また機会があれば、参加者を増やして、色々な感想や意見を語り合うことができれば、都市・高岡について、より創造的で意義のある議論を導き出せると感じた。

結果的に、参加者はクリエイターを生業にしている人や、地元の芸術系大学の学生は多く集まらなかったことは残念ではあるが、そこから学んだのは、芸術スキルがある方だけでなく、文化や芸術を愛でる人々も確実にいて、そのような人々をより多く育む土壌を作ること必要だということ。そういう人々が、クリエイターや、芸術家、毛色の異なる人々や価値観も受けとめることで、まちに多様性が広がるのかもしれない。小さな都市でも多様性があれば、人は大きな都市へは流れないわけだし…。

これだけ素晴らしい作品、いわば文化資源を持つ高岡なのだから、可能性はあるに違いない。今回、多くのことを学ばせていただいたことを高岡のまちや人々に感謝したい。

- 1 劇映画『ほしのふるまち』(2011年)の台詞
  - 2 劇映画およびマンガ『アオハライド』(2015年)の台詞
  - 3 ワークショップ参加者 二塚時男さんによる川柳
- 協力：ほんまちの家/コトノオト/御料理 大野屋/日本総合リサイクル株式会社/服部恵子 (略敬称)

シネマティック・アーキテクチャ東京ウェブサイト：  
<http://cinematicarchitecturetokyo.com>

## ポスターセッション（プレゼンタイム）

2016年度のポスターセッションは、全25団体に参加いただき、開催初日の午後には14団体によるプレゼンタイム（車座交流会）を行った。

### 【ポスターセッション参加団体】

- ◎はプレゼンタイム参加団体
- ◎株式会社安井建築設計事務所
- 香陵校区まちづくり協議会
- 一般財団法人都市農地活用支援センター
- ◎特定非営利活動法人グリーンネックレス
- 福井エコヴィレッジ研究会
- ◎JSURPルーフスケープ研究会
- 美しいまちづくり研究会
- ◎ひらひら日本実行委員会
- ◎JSURP震災復興支援タスクフォース
- ◎くまもと新町古町復興プロジェクト
- ◎富山大学芸術文化学部
- ◎NPO法人ネットワークアシストたかおか所属  
コードフォー高岡(CodeForTakaoka)
- NPO法人ふくい路面電車とまちづくりの会(ROBA)
- 路面電車と都市の未来を考える会・高岡(RACDA高岡)
- ◎金沢・LRTと暮らしを考える会
- 加越能バス株式会社
- 城端線もりあげ隊(砺波市)
- ◎高岡市空き家活用推進協議会
- 糸島空き家プロジェクト
- ◎町家体験ゲストハウス ほんまちの家
- ◎東京工業大学真野研究室
- ◎まちかどサロンプロジェクト
- 高岡伝統産業青年会
- 高岡市役所 ほか

参加団体の主な活動テーマは、以下の①～⑤の分野に大別できる。開催地の地域特性や時節が反映されているように感じた。

### ①空き家再生・リノベーション

高岡市には山町筋と金屋町という2つの重要伝統的建造物群保存地区が存在する。全国共通の課題となっている空き家対策は、これらの歴史地区においても課題となっており、取り組みが進められている。ポスターセッションでは、高岡市内の試みとして、富山大学芸術文化学部による演習「吉久の町家学生シェアハウス計画」、地域の自治会と東京工業大学真野研究室が連携して運営している「ほんまちの家」、九州大学の学生による「糸島の空き家再生プロジェクト」などの取り組みが紹介された。また、住宅だけで

なく、工場等の再生事例についても、安井建築設計事務所より愛知県半田市の赤レンガ倉庫（元ビール工場）の再生事例が紹介された。

こうした空き家の再生に向けた取り組みは、建物の歴史性の保全やストック活用のほか、地域のコミュニティに寄与する機能の付与がトレンドとなっており、地域の資産として活用するための取り組みが幅広く展開されている。

また、空き家再生のスキームは、民間所有、自治会による取得など様々な方策があるが、現況調査や改修、活用などにおいて、各事例とも大学が関与していることが印象的であった。若い居住層、かつ、まちを積極的に楽しむ主体としての学生の可能性を感じる（「空き家利活用フォーラム」の記事も併せてご参照いただきたい）。

### ②交通まちづくり

地方都市において、自動車から徒歩や公共交通を主軸とした交通体系へ転換していくことは、言うは易く行うは難しという課題であるが、今回は開催地である北陸における取り組み紹介が目立った。

高岡市では、現在路面電車である万葉線が走っているが、新幹線新高岡駅開業に伴い、高岡駅と新高岡駅を結ぶ城端線のあり方が課題となっており、城端線もりあげ隊による沿線活性化や、RACDA高岡によるLRT導入提案等も行われている。また、福井においてはトラムトレインによる交通結節機能の向上が図られており、金沢でも道路空間の再配分によりLRTを導入し、かつての路面電車の路線を復活させるような取り組みを検討する会が発足するなど、各都市の個性を活かしたLRT活用の取り組みや検討がなされている。ポスターセッションでは、加越能バス、高岡市役所による展示なども行われ、北陸新幹線開業の影響も受けながら、交通まちづくりの新たな変革期が訪れていることが感じられた。

一方、プレゼンタイムでは、単に採算性からみるとLRT導入は難しいケースも多いため、景観部門との連携や、LRT導入区間内外の駐車場料金に差をつけるなど、まち全体を総合的にデザインしながら、公共交通のロジックを組み立てる必要があるなどの意見も飛び交った。

## 平井 一步・田嶋 麻美・梶田 佳孝・長谷川 隆三

### ③ ICT技術の活用

自治体等が保有するデータを活用した地域課題解決のコンテストであるアーバンデータチャレンジ2016のワークショップが9月に高岡で開催されており、その成果も報告された。前述の高岡駅・新高岡駅の2極化に対して、その間の空間をテーマパークのように楽しめるエリアとするコンセプトのもと、アプリ「シン・タカオカ・ランド」のデモも行われた。市民の力をアプリを介して集約し、現実のまちに反映できると、まちづくりに新しいレイヤーが生まれる可能性も考えられる。データやアプリを活用した新しいまちづくりの動きを実感した。

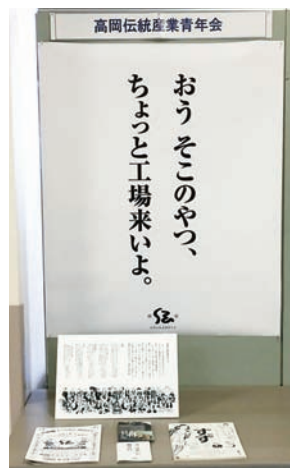


### ④ 震災復興

本会議の開催は、2016年4月14日～16日に発生した熊本地震の半年後というタイミングであった。熊本中心部では、協会会員の富士川氏が住居・事務所を構えており、自身も被災者であるが、精力的に復興まちづくりに取り組んでいる。熊本城の被災状況は報道で盛んに取り上げられるが、城下町である新町古町においても、伝統的な建物が崩壊する深刻な被害が出ている。復興基金は地盤の改良優先であり、建物やまちなみの再生に向けては、グループ補助金の交付申請や新しい使い方なども踏まえて取り組んでいく必要があるとの報告があった。また、協会では2013年度から岩手県大船渡市越喜来地区の復興まちづくりを支援しており、近年の状況について報告を行った。(詳細は「復興まちづくりフォーラム」の記事を参照頂きたい)。

### ⑤ 景観・環境

地域の環境に応じた生活景の形成としては、ルーフスケープ研究会では瓦屋根という視点から、産業や技術伝承も含めて景観形成を検討している。地方によって瓦のあり方も異なるが、やはり北陸では黒瓦が景観の要となっている。グリーンネックレスからは緑や環境のつながりを武蔵野全体でつくる活動を紹介いただいた。雨デモ風デモハウス、ハケの学校、与那交流館、コミュニティアーキテクト育成など幅広い活動が展開されている。ひらひら日本からは、花と緑のまちなかフェスティバルとして、緑に対する理解やシビックプライド形成の取り組みの他、トラックガーデンなどユニークな取り組みも紹介いただいた。両グループともポスターセッションの常連であり、まちづくりにおける息の長さを感じる。



### ■ポスターセッション(プレゼンタイム)を終えて

全体としては時間配分もよく、質疑応答も活発なセッションとなり、担当者としてはほっとしているところである。残念ながらプレゼンタイムにはタイミングが合わず、ポスター出展のみとなった団体からも興味深い内容を提示いただいた。

自主参加型のポスターセッションは、全国まちづくり会議の趣旨である草の根まちづくりの支援という理念に基づき、基本的な取り組みとして継続実施している。毎年、開催都市の活動団体を中心に全国から参加をいただいているが、全まちも12回目を迎え、今後の実施方法については、一度再考する時期にあるかもしれない。例えば、フォーラムと関連テーマのポスター展示をセットで行うことで、連続的な議論が行われることを期待する、プレゼンタイム参加者以外の声を吸い上げるコメントボードを用意し、出展団体の取り組みを応援するといった工夫も考えられる。来年度の課題としたい。

# 全まち高岡の成果と意義

認定NPO日本都市計画家協会会長 小林 英嗣

## 1. 高岡・北陸・裏日本

「伝統と創造のまちづくり」をメインテーマにした『全国まちづくり会議2016 in 高岡』が、北陸新幹線開通で沸いている北陸の拠点都市・高岡で開催された。

全まちを高岡で開催すると決めたとき、『裏日本』（古厩忠夫／岩波新書1997）を改めて読み直したが、北陸地方が明治から戦後高度成長期まで、太平洋ベルト地帯への傾斜投資によって地域格差がいかにならされてきたのかを、綿密な資料で分析。納税は北陸、投資は太平洋地帯。そして「裏日本」イデオロギーとイメージが作られてきたこと、その「裏日本」を超えるための内発的発展の道と「環日本海ネットワーク」の主張も改めて振り返ることができた。都道府県幸福度1,2,3位を福井・富山・石川が独占していることも。

北陸新幹線開通を契機に、いわゆる北陸資本主義が改めて語られ始めている。多くの内発的北陸地盤企業が、地元の資本・労働力・頭脳をとおして、ものづくりを中心とした中小企業を含めて、近年、いかに進展・進化しているかについても改め注目されている。そして、北陸資本主義の風土は、浄土真宗／親鸞の教え、勤労と節約、忍耐強さの精神とコミュニティシップにあると説く人もいる。

## 2. 全まち高岡のメニュー

●400年余りの歴史資源と伝統そして産業技術の蓄積を持つ高岡で開催された『全国まちづくり会議』のオープニングは、「少子高齢化」「場づくり」「伝統を生かした産業育成」をキーワードにし、多主体共生による再生のまちづくりの重要性に言及した『キーノートスピーチ（小泉秀樹教授／東大）と高岡市長参加のシンポジウムパネルディスカッション』。

●次いで、イノベーションをキーワードにしたまちの創発についての多様な事例とその進化の方向性についての議論がとびかった「ものづくりまちづくりセッション」、空き家利活用と場づくりを切り口にした二つのフォーラムでは、まちづくりの担い手にならんとする若い世代のイノベティブな実践と発信が魅力的で、ある種のシビックプライドを感じることができ、同時に高岡（北陸の諸都市）は「使ってみたく

なる」リソースをもっていること、そしてシビックプライドが（裏日本という）地域の価値を再定義しつつあると実感。

こうした新しいネットワークや実践から、都市が、働いて・移動して・寝る空間の集合体ではなく、多様な暮らしと生業が営まれ、異なる価値観が相互に尊重され、刺激しあう場へと急速に進化してゆく姿と今後の新しい実験と連携の可能性を感じることができた。JSURP日本都市計画家協会もその一端をサポートしつつけることも必要だろう。

●復興まちづくりフォーラムでは復興まちづくりを語り続けるべき偶然が重なった。復興途上の東日本大震災（2011.3.11）、そして開催直前に発災し、復旧の最中の熊本地震（2016.4.16）という一連の大災害を目の当たりにした復興フォーラムでは、歴史を大きく俯瞰しながら災害の歴史を考えざるを得なかった。

たまたま、全まち開催の直前にポルトガルを訪れていたせいもあり、リスボン大地震（1755.11.01）と津波・火災という災害エポックが、リスボンの創造的復興・再生と並行して、世界を変え、近代への幕を開けたことを想起せざるを得なかった。近代科学・近代技術・近代地震学・近代建築学・近代都市計画学、これら全てがリスボン大地震に起因するとも言われている。強く大きな近代建築、都市を強く、安全にする近代都市計画や都市デザインもリスボン大地震の産物とも言える。しかし、神戸・東日本・熊本を襲った大災害の教訓は、どんな強さも、どんな大きさも、大自然の圧倒的な力の前では無力であることを示した。

日本の近代化、あるいは戦後高度成長期を支えてきた近代都市計画学からの離陸の必要性和同時に地方創世を支える新しい「哲学」「科学」「技術」「政治」などなど、そして「学」の必要性をも考えさせられたフォーラムと言え。また同時に、都市計画法制定100年をむかえる今、これからの都市について考えるべき課題が変わっていることや脱近代の真っ只中であることを意識すると、改めて法や制度そして技術を「変えなきゃ」、また「社会が求めている都市計画家（都市計画プランナー）の姿・役割・職能は？」と考えを広げた方

も多いのではないだろうか。これは、第三期に入ったJSURPの大きな宿題でもある。

●最終日は、わが国の創造都市政策を提唱・リードする佐々木雅幸教授（同志社大学）による特別講演と鼎談で締め括られた。

世界を俯瞰しながらの今日的な創造都市政策の実際とグローバルな連携の重要性と可能性について佐々木教授の言及は参加者の興味を引いた。加え、ローカル高岡を詳細に見ながら、今後の創造都市・高岡の方向性と創造都市ネットワーク日本への参加の必要性は、創造都市連合・北陸を示唆するものでもあった。

●鼎談では、地方創生の風が吹きまくる日本各地域の地域づくりで「創造都市」と「エリアマネジメント」をヨコ串に通すことの、都市進化における必要性が共有化された。

## 3. デジタル時代の創造的な都市進化とコミュニティシップ

ソーシャルネットワーク全盛の影で、都市や地域、そして生活する人間と常に向き合わねばならない都市計画（まちづくり）家にとって、「コミュニティ意識」が失われることの危機を感じることもある。ソーシャルメディアは確かにオンラインの向こう側にいる誰とでも繋げてくれるし、グローバルに素早くソーシャルネットワークを広げてくれる。しかし、地域づくりやまちづくりにおいて最も重要な濃密な人間関係を犠牲にはいけないだろう。「ネットワーク」は人をつなぐものであり、「コミュニティ」は地域のメンバーやシビックプライドをケアするためのものであり、高岡・北陸に必要な・不可欠なものはコミュニティシップだろう。

近代的な都市計画（規範）や技術を離陸して、「創造のまちづくりを発明」するためには、強いコミュニティ意識が必要不可欠であること、そして地域に必要な不可欠なことは「人的資源の集合体」ではなく、機能する「人間のコミュニティ」であることを「全まち高岡2016」で実感した。地域を進化させるために必要な協働や共創には「コミュニティシップ」の存在が重要。地域や社会をイノベートしようとする無頼・自由人の集う場＝JSURPではないだろうか？私は、昨年引き続き、JSURPイノベーションの胎動と心地よく熱い風を「全まち2016in高岡」でも、強く感じる事が出来た。



# 次回開催のご案内

認定NPO日本都市計画家協会横浜支部長 田島 泰

## ■高岡でのエンディング

高岡での全まちは地方都市開催の特長を活かした充実した内容で、各所で熱心な議論が繰り広げられ成功裏に終了しました。閉会式では、恒例の次回開催地の紹介があり、横浜支部長である私からご挨拶させていただいたところです。今回は横浜で開催すること。そして横浜支部では、会員の若返りが進んでおらず高齢化が進み、活動停滞の一因にもなっていること。これは横浜支部に限らず、他のまちづくり団体にも共通した課題でもあり、横浜全まちでの企画がまちづくりに関わる人たちの若返りの契機となれば嬉しい、というお話をさせていただきました。

全まちは、東京開催と地方開催を隔年ごとに交互に実施する方針が決められたことにより、メリハリができ、継続的に開催し続ける楽しみのひとつにもなっています。また、東京開催といっても、都内各所の他、埼玉や川崎など、幅広く開催地が選定されています。このような経緯で高岡の次ぎの全まち開催都市として、横浜が選定されました。横浜全まちは高岡に負けず、横浜らしい特長を出したイベントになれば良いと考えています。

## ■次回は横浜開催

横浜全まちは、2017年10月7日(土曜日)と8日(日曜日)を有力候補日として検討中です。実行委員長は横浜市大の中西正彦先生、副委員長は横浜国大の野原卓先生にお引き受けいただきました。次ぎの世代を担っていく人たちが中心になって、意欲的な企画が進められればという主催者側の想いもあります。正式なキックオフとなる第一回実行委員会を年明けの1月13日に予定しており、既に日本都市計画家協会の事務局より会員各位にはご案内されたところです。(キックオフ後も随時参加者受付中です)

また、開催場所については、テーマの広がりによって必要な規模が異なるため、企画内容と合わせて現在検討中です。

## ■多くの方々と一緒にこれから考えていくこと

横浜全まちはまちづくりに関わる人の若返りの契機にするためには、どうすれば良いか? という議論をこれまで何人かの方々として参りました。この議論は、まさに都市計画家協会本部理事会においても、協会の存続に関わる継続的な活動を実施していくための会員獲得の議論と同じテーマであり、活発な意見交換が行われているところです。

横浜でのこれまで話してきた中心的な議論は、「まちづくり」の領域拡大の時代の潮流をどう捉えるか? という話題です。「アート」とまちづくりの関わりは

古くからあるテーマですが、これに加えて「子育て」や「農業」「健康」「IT」など多くの関連するテーマが挙げられ、それぞれに具体的に活動をされているキーマンとなる方々の話題になりました。これらを包括して、中西実行委員長から提案されたテーマは「まちづくりの新しい価値」というキーワードです。

まちづくりの領域拡大は、「まちづくりの担い手」⇒「高齢化」⇒「概念の固定化」⇒「参加の魅力不足」⇒「活動のシュリンク」という構図から脱出するための方策です。「まちづくり」の概念をものづくりに直結する旧来のイメージに固定化せず、「豊かに生きるための知恵」という概念にまで拡大して考えれば、目標を同じくする関係者も拡大していきます。ここに「まちづくり」の新しい価値を見出す展開の可能性があるという仮説の下に横浜全まち開催が位置づけられれば良いと考えてます。具体的な議論はこれからです。

日本都市計画家協会本部では、小川町の新しい協会本部事務所を開かれた情報交換の場として企画しているプログラムが多くあり、「JSURPまちづくりカレッジ」や「J'sカフェ」などには、多くの若い方々が参加しています。必ずしもこの展開が会員数の増加に直結していないのが現状ですが、この方向を模索し続けることが家協会の将来を切り開いていく予感があります。また、これに加えて従来では考えてもみなかった領域への拡大によってまちづくりの参加者の層を厚くしていくことにより、思わぬ展開を生みだすかもしれません。横浜全まちはひとつの契機にならないか? と考えているところです。

是非、ご興味のある方々は、横浜全まち実行委員会に参加してください!



開港の地 横浜都心臨海部の風景

## 前田利長公にゆかりの地を巡ったエクスカーション

認定NPO 日本都市計画家協会理事 佐谷 和江

エクスカーションは2016年10月16日(日)の午前中に開催されました。加賀前田家の2代目で、高岡のまちを開いた前田利長公について各所のガイドさんが話してくれて、今でもまちの人に尊敬されているのが伝わってきました。以下、案内していただいたところを簡単にご紹介します。

### ■金屋町 鋳物師の町並みと「鋳物資料館」

高岡鋳物発祥の地。1611年に前田利長公が7人の鋳物師を呼び寄せ、幅50間、長さ100間の土地を与えて鋳物場を開設させたそうです。現在は、多くの工場が郊外に移転しましたが、千本格子の家並みが大切に保存されており、2012年に伝統的建造物群保存地区に指定されました。道路舗装や側溝の蓋などのデザインが配慮されており、町並みを引き立てていました。

### ■山町筋 土蔵造りの町並みと「菅野家住宅」

1609年の高岡開町以来の商人町。ここを中心に高岡御車山祭を奉じていることから山町と呼ばれています。明治に入り大火で町の大部分が被災した後、富山県の

法令に基づき、土蔵造りの防火建築が建てられ、2000年に重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けています。菅野家は、1900年(明治33年)の高岡大火以降に、約10万円の巨費を投じて建てられ、山町筋の土蔵造りを代表するものとして重要文化財に指定されています。



### ■高岡御車山会館

2015年に会館した高岡御車山祭で曳き出す御車山と呼ばれる山車の展示施設。高岡御車山祭は、重要無形民俗文化財、重要有形民俗文化財の両文化財に指定されています。また、12月にはユネスコの無形文化遺産に登録されました。おめでとうございます。

### ■瑞龍寺

前田利長公の菩提寺。3代目が造営には約20年もの歳月を費やし建てたもので、仏殿、法堂、山門の3棟が近世禅宗様建築の代表作として、1997年に国宝に指定されています。

秋田県立大学教授 山口 邦雄

本書は、2016年10月29日に開催された「石田頼房先生をしのぶ集い」において追悼集として配付されたものであり、2編構成で全121頁のものである。

### ●都市計画研究者・実践者としての業績

第1編では、石田頼房の業績が、研究の志向性や研究環境を交えつつ、今まであまり語られてこなかった深淵な部分にまで思いを馳せるアプローチをとって紹介されている。

都市農村計画から都市計画史までをカバーした研究の全体像は、同じ世代といえる渡辺俊一氏が、研究領域、研究スタイル、研究成果、学会活動、その他の活動等にわけて紹介・論考している。また、東京都立大学での諸活動については、その場を共有した高見澤邦郎氏が、当時の学内事情も交えながら紹介・論考している。係わり方の異なる者が照射する石田頼房像は、共通点もあるが相違点もある。それを読み解くのは、読者に任せよう。いずれにせよ、強い実践・実用志向を持って研究にあたったその人物像に迫り、さらに今後の都市計画を考える良き機会となる内容であり、業績紹介を超えた読後感が余韻をもって残る。



### ●手渡されたもの、次世代へ手渡すもの

第2編は、東京都立大学での1960年から1995年までの35年間にわたる研究・教育活動のなかで関わった教え子たちによる45編の寄稿集と石田頼房が計画に直接関わった4地区の紹介である。

行政職員として、計画コンサルタント・設計者として、研究・教育者として、石田頼房から何を手渡され、如何なるプロジェクトでそれを具現化させ、そして次世代に何を手渡していくのかが記されている。教育者としての石田頼房像が教え子たちの言葉で浮き彫りになってくるが、それ以上に石田頼房が計画というものに対する強い希望とゆるぎない信頼をもっていただことの垣間見える内容となっている。

### ●問い合わせ

なお、編集委員会によれば、本追悼集は多少の余部があるので、希望される方は次のアドレスにメールにて申し込みくださいとのこと(頒価一部2000円〈送料込み〉/送本時に同封の請求書記載の振込先口座に送金)。

申し込み先:(株)南風社

nampoo@nampoosha.co.jp

## 本部だより

都立江東商業高等学校の高校生3名が、社会学習、NPO法人訪問インタビューの一環として、平成28年11月9日(水)14:30に、当協会事務局を訪ねて来られ、質疑応答を行いました。

3名の女子高校生は、いずれもご両親が建築関係の仕事に携わっている関係から、都市計画という分野に関心を持って、当協会を訪ねることとしたということでした。

以下、3名の高校生から送られてきた感想文の内容の一部をご紹介します。

『インタビューをしていくなかで、私たちも、自分の住んでいる町について考えさせられる場面が多くありました。私たちの子供達の世代も過ごしやすいまちになるよう計画的にまちづくりが行われていることに貴団体の意義を強く感じました。』

『私は町づくりというのはどんな活動をしているのかわかりませんでした。道を作ったり建物をたてたりするにも人が集まるように考えられていてすごいと思いました。』

『私は、今回の訪問がなければ、おそらく、まちづくり自体に興味を持つことはなかったと思います。(中略)まちづくり、住環境は私達の生活に密接に関わっているので、もっとみんなが関心を持つべきだと思います。』

次世代のまちづくりの担い手を育てることも、当協会のミッションの一つと痛感する経験でした。

(土肥英生・記)

## 北海道支部だより

今年度より近藤支部長・平下事務局長の新体制がスタートした北海道支部では、新たな活動の一環としてJ's Caféの北海道版を立ち上げることとし、去る11月25日に第1回目を開催しました。

メモリアルとなる初回は、丸の内朝大学等で活躍され、現在は『Sapporo Smile Woman Project (働く女性のサードプレイス)』を主催されている石川頼子氏(プロジェクトデザイナー)をスピーカーにお招きし、『都市×健康』をテーマにディスカッションを行いました。直前のご案内にも関わらず20名強のご参加を頂き(うち6割強!が女性)、活発な議論が出来ました。「まちづくりをやっている人たちは疲れている(!)」「女性をターゲットに(朝大学やまちの保健室など)エッジを効かせた取り組みは効果的」「女性が働きやすい街ナンバーワンを目指す」と創造的なアイデアが生まれる「人・モノ・カネ・情報の4要素をいかに集めるか」など様々な意見が寄せられました。

今後も引き続き、基本テーマを『都市×○○』と据えて、

参加者とスピーカーのインタラクティブな議論を呼び起こせる場を作り上げていきたいと考えています。

(平下貴博・記)



## 福岡支部だより

年始早々の寒波到来で、九州福岡も随分寒くなりました。昨年、福岡市の玄関口である博多駅前の地下鉄工事での道路陥没事故が世間を騒がせたのは記憶に新しいところです。短期間での復旧と人的被害がなかった事が評価されるような報道がなされましたが、事故を未然に防ぐ手当がなかったものかと思われ

昨年、福岡支部の体制も変わりましたので、新たな取り組み、従来からの取り組みをそれぞれ報告いたします。

『蓑原敬先生の話をつと聴く会 平成29年2月27日』

都市環境デザイン会議主導の企画への相乗り企画です。蓑原敬先生が高等学校時代を福岡で過ごされた都市計画家である事は知る人ぞ知る事実ですが、この度、懐かしい福岡で放談していただき、若手の都市プランナーとのセッションなど蓑原敬さんにトコトン話を聴く企画です。

『高見三条住宅地秋のまちあるき 平成28年11月20日』

北九州市八幡東区高見地区で年2回行なっている街並み点検と景観まちづくりコンサルです。

昨年は、夏が異常に長かった為、11月後半の実施となりました。(写真参照)

既に十数年の歳月を経た戸建住宅地ですが、宅地内外の緑の環境が程良く管理され、建物自体も建築協定に基づき居住者の手で外壁の塗り替えなど粛々とメンテナンスが進められています。これまで、年2回のまちあるきとその都度発行した報告レポートなどを通して住民間で意識啓発を続けている成果ではないかと思われ。

(牧 敦司・記)



2016年9月1日～12月31日

協会の動向

<2016年9月>

- 1日 生産緑地研究会
- 6日 協会HP打合せ
- 7日 震災復興支援TF(南気仙沼地区)  
交流広報委員会  
Jsurrpまちづくりカレッジ(プレイスメイキング⑤)
- 8日 ejob事業事務局会議  
震災復興支援TF打合せ
- 9日 Jsカフェ
- 11日 第116回街なか研究会
- 12日 運営会議
- 13日 自転車まちづくり研究会
- 16日 ものづくり・まちづくり研究会
- 24日 全国まちづくり会議2016in高岡事前エクスカージョン
- 25日 シネマティックアーキテクチャ東京
- 27日 Jsurrpまちづくりカレッジ打合せ
- 28日 Jsurrpまちづくりカレッジ(エリアマネジメント⑤)
- 29日 豊橋打合せ

<2016年10月>

- 3日 第146回理事会
- 6日 ejob事業事務局会議  
農商工連携による地域プロジェクト支援研究会
- 8～10日  
シネマティックアーキテクチャ in高岡ワークショップ
- 11日 ものづくり・まちづくり研究会
- 15～16日  
全国まちづくり会議2016in高岡
- 19日 提言事業
- 20日 ejob事業座談会
- 24日 グリーンインフラ研究会
- 26日 Jsurrpまちづくりカレッジ(クラウドファンディングの実践①)
- 28日 Jsカフェ

<2016年11月>

- 1日 生産緑地研究会
- 2日 Jsurrpまちづくりカレッジ(人口減少社会を読む2①)
- 8日 ejob事業事務局会議  
運営会議
- 9日 提言事業  
Jsurrpまちづくりカレッジ(自転車まちづくりのススメ①)
- 11日 Jsurrpまちづくりカレッジ(クラウドファンディングの実践)打合せ
- 14日 大船渡打合せ
- 16日 中期ビジョン
- 17日 Jsurrpまちづくりカレッジ(自転車まちづくりのススメ②)
- 21日 Jsurrpまちづくりカレッジ(人口減少社会を読む2②)
- 22日 震災復興支援TF(越喜来)
- 24日 交流広報委員会
- 26日 Jsカフェ
- 27日 シネマティックアーキテクチャ東京
- 29日 全国まちづくり会議2017in横浜打合せ
- 30日 Jsurrpまちづくりカレッジ(クラウドファンディングの実践②)

<2016年12月>

- 1日 Jsurrpまちづくりカレッジ(自転車まちづくりのススメ③)
- 2日 第147回理事会
- 6日 Jsurrpまちづくりカレッジ(人口減少社会を読む2③)
- 7日 Jsカフェ  
第117回街なか研究会
- 8日 Jsurrpまちづくりカレッジ(自転車まちづくりのススメ④)
- 9日 提言事業
- 10日 シネマティックアーキテクチャ東京
- 14日 震災復興支援TF(熊本)  
Jsurrpまちづくりカレッジ(クラウドファンディングの実践③)
- 15日 Jsurrpまちづくりカレッジ(自転車まちづくりのススメ⑤)
- 16日 ejob事業事務局会議
- 19日 生産緑地研究会
- 20日 Jsurrpまちづくりカレッジ(人口減少社会を読む2④)

2016年9月1日～12月31日

会員の動向

★入会者4名(賛助個人4)

賛助個人会員：後藤弘幸、米澤克人  
高浜洋平、伊藤洋平



Japan Society of Urban and Regional Planners  
認定NPO日本都市計画家協会

【Planners●都市計画家】2017年1月31日発行

編集● 認定NPO日本都市計画家協会 / Planners編集長：佐谷和江

【編集委員】内山征 小泉秀樹 今場雅規 園田聡 高鍋剛 田嶋麻美 中川智之  
【交流・広報委員長】渡会清治 【北海道支部】矢野ひろ 【静岡支部】丸山正仁  
【横浜支部】田島泰 【福岡支部】牧敦司

制作● 認定NPO日本都市計画家協会 デザイン●スタジオオガボン

発行● 認定NPO日本都市計画家協会

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2丁目10番地 香取ビルアネックス2階  
TEL 03-6273-7491 / FAX 03-6273-7492